

加古川市所在

奥新田東古墳群

-山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXV-

2001年3月

兵庫県教育委員会

加古川市所在

奥新田東古墳群

- 山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告 XXXV -



2001年3月

兵庫県教育委員会



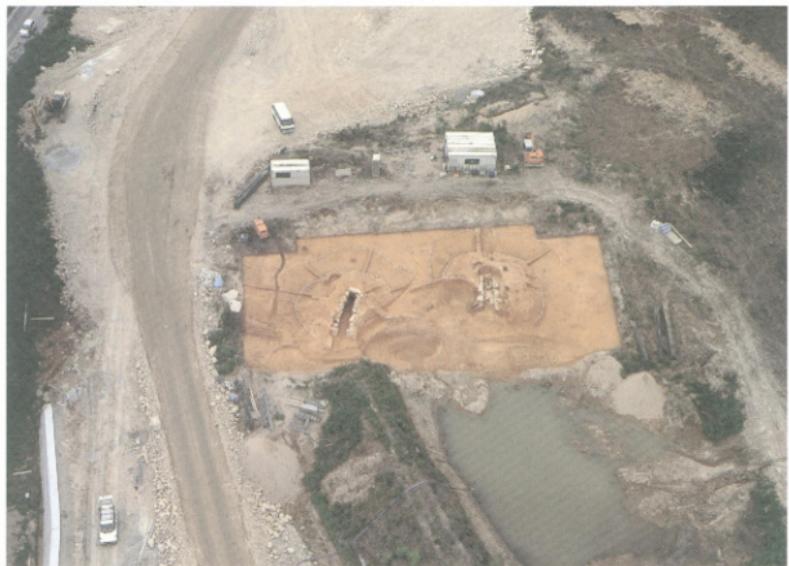
調査区遠景（南から）



調査区遠景（北西から）



1・2号填全景（南西から）



1・2号填全景（南東から）



1号墳調査前全景（南東から）



1号墳石室石材崩落状況（南から）



1号填石室内（南から）



1号填敷石検出状況（南から）



1号填天井石架構状況（南から）



1号填天井石除去後（南から）



1号墳石室基底石（南から）



1号墳石室基底石（北から）



1号墳奥壁裏側土層断面（西から）



1号墳石室墓壙（南から）



1・2号填基底石（南東から）



1・2号填基底石（南東から）



2号墳調査前全景（南から）



2号墳石室石材崩落状況（南東から）



2号墳石室内石棺（南東から）



2号墳1号棺（南西から）



2号墳1号棺周辺（北東から）



2号墳2号棺周辺（北東から）



2号填全景（南東から）



2号填石室基底石（南東から）



2号墳家形石棺底石



2号墳家形石棺底石

例　言

1. 本書は兵庫県加古川市平荘町中山863-3に所在する奥新田東古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、兵庫県教育委員会が日本道路公団大阪建設局の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は平成7年度に実施し、兵庫県教育委員会の岸本一宏・高木芳史が担当した。調査にあたっては、奥村組土木興業株式会社と工事請負契約を締結して実施した。
なお、本古墳群の遺跡調査番号は950059である。
4. 古墳の航空写真はアジア航測株式会社に委託して撮影したが、現地での遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真は株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影した。
5. 本書で使用した座標は第V系国上座標であり、水準はT. P.（東京海平均海水準）を使用した。
6. 古墳等の土層色名および土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。
7. 本書の執筆は発掘調査担当者が行い、第3章第1節を高木、その他を岸本が担当した。また、編集は柏原美音の補助を得て岸本が行った。
8. 報告書作成にあたっては、下記の諸氏にご指導・ご教示をいただいた。記して謝意を表する。
岡本一士・岸本道昭・立花　聰・中村　弘・西川秀樹・菱田哲郎・藤原清尚（五十音順）

本文目次

第1章 調査の契機と経過	1
第1節 発掘調査の契機	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 整理作業の経過と概要	2
第2章 古墳をとりまく環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の結果	
第1節 1号墳の調査	
立地および検出状況	9
墳丘	9
埋葬施設	9
出土遺物	11
小結	11
その他の遺構	12
第2節 2号墳の調査	
立地および検出状況	13
墳丘	13
埋葬施設	14
出土遺物	17
小結	20
第4章まとめ	
第1節 奥新田東古墳群の特徴	21
第2節 石室内に小型石棺を内蔵する古墳について	21

図版目次

- | | |
|------------------|-------------------|
| 図版 1 調査位置 | 図版 8 2号墳墳丘土層断面図 |
| 図版 2 地形測量図 | 図版 9 2号墳石室実測図 |
| 図版 3 1号墳地形測量図 | 図版10 2号墳石室内石棺配置図 |
| 図版 4 1号墳墳丘土層断面図 | 図版11 2号墳石室内石棺断面図 |
| 図版 5 1号墳石室実測図(1) | 図版12 1号墳周溝埋土土層断面図 |
| 図版 6 1号墳石室実測図(2) | 図版13 2号墳周溝埋土土層断面図 |
| 図版 7 2号墳地形測量図 | 図版14 出土遺物実測図 |

写真図版目次

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 卷頭図版1上 椰査区遠景(南から) | 卷頭図版7上 1号墳奥壁裏側土層断面(西から) |
| 1下 椰査区遠景(北西から) | 7下 1号墳石室墓壙(南から) |
| 卷頭図版2上 1・2号墳全景(南西から) | 卷頭図版8上 1・2号墳基底石(南東から) |
| 2下 1・2号墳全景(南東から) | 8下 1・2号墳墓壙(南東から) |
| 卷頭図版3上 1号墳調査前全景(南東から) | 卷頭図版9上 2号墳調査前全景(南から) |
| 3下 1号墳石室石材崩落状況(南から) | 9下 2号墳石室石材崩落状況(南東から) |
| 卷頭図版4上 1号墳石室内(南から) | 卷頭図版10上 2号墳石室内石棺(南東から) |
| 4下 1号墳敷石検出状況(南から) | 10下 2号墳1号棺(南西から) |
| 卷頭図版5上 1号墳天井石架構状況(南から) | 卷頭図版11上 2号墳1号棺周辺(北東から) |
| 5下 1号墳天井石除去後(南から) | 11下 2号墳2号棺周辺(北東から) |
| 卷頭図版6上 1号墳石室基底石(南から) | 卷頭図版12上 2号墳全景(南東から) |
| 6下 1号墳石室基底石(北から) | 12下 2号墳石室基底石(南東から) |
| 図版1上 1・2号墳調査前全景(南東から) | 卷頭図版13 2号墳家形石棺底石 |
| 1下 1・2号墳調査前全景(北から) | |
| 図版2上 1・2号墳調査前全景(南東から) | 図版6下 1号墳石室内(南から) |
| 2下 1・2号墳調査後全景(南東から) | 図版7上 1号墳全景(南上から) |
| 図版3上 1号墳調査前全景(南東から) | 7下 1号墳頂盛土除去後全景(南上から) |
| 3下 1号墳調査前全景(南から) | 図版8上 1号墳天井石除去後全景(南上から) |
| 図版4上 1号墳石室石材崩落状況(南上から) | 8下 1号墳天井石除去後全景(南上から) |
| 4下 1号墳石室石材崩落状況(南から) | 図版9上 1号墳石室西側壁(南東から) |
| 図版5上 1号墳石室石材崩落状況(北上から) | 9下 1号墳石室東側壁(南から) |
| 5下 1号墳下面石材崩落状況(南から) | 図版10上 1号墳石室内敷石(南から) |
| 図版6上 1号墳石室前部(南から) | 10下 1号墳奥壁裏側墳丘土層断面(西から) |
| | 図版11上 1号墳西壁裏側墳丘土層断面(南から) |
| | 11下 1号墳東壁裏側墳丘土層断面(南から) |

図版12上	2号墳周溝内埋土土層断面（南西から）	図版19上	2号墳石室内2号棺周辺（北東から）
12下	1号墳石室墓擴（南から）	19下	2号墳3号棺脇土器出土状況（南東から）
図版13上	2号墳調査前全景（南から）	図版20上	2号墳東壁裏側墳丘土層断面（南東から）
13下	2号墳石室検出状況（南東から）	20下	2号墳奥壁裏側墳丘土層断面（南西から）
図版14上	2号墳石室石材崩落状況（南東から）	図版21上	2号墳全景（南東から）
14下	2号墳石室石材崩落状況（南東から）	21下	2号墳基底部全景（南東から）
図版15上	2号墳石室石棺検出状況（南東から）	図版22上	2号墳石室墓擴（南東から）
15下	2号墳石室石棺検出状況（南東から）	22下	S X 0 1（東から）
図版16上	2号墳石室・石棺全景（南東から）	図版23上	2号墳墳丘北東裾部集石（北東から）
16下	2号墳石室内部石棺全景（南東から）	23下	調査参加者
図版17上	2号墳石室内1号棺周辺（北東から）	図版24	各造構土層断面および遺物出土状況
17下	2号墳石室内1号棺周辺（北西から）	図版25	出土遺物
図版18上	2号墳1号棺検出状況（南西から）	図版26	2号墳出土家形石棺底石
18下	2号墳1号棺完掘状況（南西から）		

挿図目次

第1図	周辺の古墳分布図	4
第2図	1号墳構築のチャートモデル	12
第3図	2号墳出土家形石棺底石拓本	18
第4図	2号墳出土組み合わせ式家形石棺短側石	19
第5図	小型石棺を藏する横穴式石室	23
第6図	横穴式石室内に小型石棺を藏する古墳分布図	24

表目次

第1表	周辺の古墳	5
第2表	横穴式石室の小型石棺一覧表	24

第1章 調査の契機と経過

第1節 発掘調査の契機

奥新田古墳群は昭和48年兵庫県教育委員会発行の『遺跡分布地図及び地名表』第2分冊によれば東西2基の円墳で構成される古墳群として登録され、奥新田東1号墳は奥新田古墳として「横穴式石室、主体部の天井石の所から出入りできる」と記載されていた。なお、奥新田西古墳は奥新田古墳1号墳として、「横穴式石室、周囲は畠として開拓されている。墳丘は殆ど破壊され、石室がむき出しになっている」と記載されていた。また、昭和59年に発行された『加古川市遺跡分布地図』では、県道を隔てて西側の古墳が奥新田西古墳、東側が奥新田東古墳と命名された。

そのうちの奥新田東古墳が山陽自動車道（三木～姫路間－第10次区間）建設事業予定地内にかかるため、兵庫県教育委員会が平成元年度に位置確認のための分布調査を実施したところ、従来東古墳とされていたものの北東側にもう1基古墳が存在することを確認した。これら古墳群を山陽自動車道No.103地点と呼称した。その後、平成4年度に遺跡範囲の確認調査を実施し、旧東古墳を東1号墳、新発見の古墳を東2号墳と命名した。その際に簡単な墳丘測量図を作成した。東1号墳は削平、崩壊がみられるが、直径約9m、高さ約2mの円墳であり、石室は奥行き4.2m、幅1m、高さ1.5mであることが明らかとなった。東2号墳は1号墳以上に削平、崩壊をうけ、損傷が著しく、トレンチでは周溝の一部が確認された。

兵庫県教育委員会と日本道路公団大阪建設局が道路建設予定地内の古墳について取り扱いを協議した結果、古墳群2基の全面調査を実施することになった。なお、調査開始時点での古墳群の名称は、奥新田古墳群であるが、特に、今回の全面調査箇所の奥新田東1・2号墳についてのみ呼称する場合は、奥新田東古墳群と称することを断っておく。

第2節 発掘調査の概要

調査開始時点での現状は、両古墳とも南東側にある池の掘削に伴う、墳丘の一部削除が認められ、1号墳は横穴式石室天井石が残存していたものの、2号墳は墳丘中央部が掘削され、石室の上半部分が無くなっている状況であった。

調査は、現況の地形測量をおこなったあと、1号墳がその墳丘および石室の一部が池堤に埋もれていたため、バックホーにより池堤盛土の一部を除去した。その他の部分は人力により掘削をおこなった。墳丘部分の表土および後世の流入土を除去した時点で、両古墳とも石室内の調査を先行しておこない、石室内埋土の除去および石室内施設の写真撮影・実測と石室の実測をおこなった。石室および内部施設については、隨時写真撮影や縮尺1/10で平面実測をおこなうなど記録に努めた。その後、周溝を掘削し、残存墳丘の地形測量をおこなった。航空写真は、石室床面を検出し天井石を取り除いた時点で撮影をおこなった。航空写真撮影後は古墳構築状況確認のための土層観察用畦を残し、墳丘除去作業を人力でおこなった。周溝については、その一部が当初の調査範囲からはみ出すことが判明したため、その部分の調査区を拡張し、表土についてはバックホー、周溝埋土は人力により掘削した。調査面積は654m²であった。

墳丘を除去した後は石室石材を順次上から除去し、石室構築のための墓濠を検出してその掘削をおこ

ない、古墳築造当時の地表面の検出、写真撮影・実測および地形測量をおこない、調査を終了した。

発掘調査時の現地体制は以下のとおりである。

発掘調査 担当者 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第2班 岸本一宏

高木芳史

現場補助員 高島知恵子

前田陽子

現場事務員 佐藤朋子

室内作業員 大田八重子

第3節 整理作業の経過と概要

奥新田東古墳群の出土品整理および報告書作成にかかる作業は平成12年度に実施し、水洗い以外の全工程を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所でおこなった。なお、水洗い作業は発掘調査時に実施した。作業内容はネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース、レイアウト、報告書印刷および金属器保存処理である。

2号墳石室内出土の家形石棺底石は脆弱であったため、埋蔵文化財調査事務所には運ばず、魚住分館(明石市魚住町清水字立合池ノ下)にて実測・拓本、写真撮影などの作業をおこなった。その作業をおこなうにあたっては、石棺底石が脆い凝灰岩製であったため、あらかじめ樹脂で固めるなどの保存処理作業を実施した。

使用した薬剤は、株式会社アクト社のエチル・シリケート系薬剤のOH100である。石棺をこの薬剤に完全に漬け込み、硬化させることとした。

含浸後、2時間が過ぎても気泡が出ていたが、処理後の色調の変化を危惧するため、3時間後に引き上げた。重量は処理前が114kg、処理後が120kgである。その後、日陰で乾燥させ、硬化させた。

処理の結果、処理前は手に石材の粉が付くほどであったのが、処理後はなくなった。色調は、処理前が白っぽかったのが、処理後は全体に若干の瀝青色を呈し、クリーム色になった。

なお、巻頭図版13の下の写真は処理前、上の写真が処理後である。

奥新田東古墳群出土品整理作業の体制は以下の通りである。

出土品整理作業 担当者

職員 岸本 一宏 高木 芳史

菱田 淳子(整理作業進行)

岡本 一秀(金属器保存処理)

中村 弘(石棺保存処理)

嘱託員 柏原 美音 津田 友子 垣本 明美 喜多山好子(以上出土品整理作業)

栗山 美奈 和田寿佐子 前川 悅子 藤川 紀子(以上金属器保存処理)

小林 俊子 渡辺二三代 川上 啓子 多賀 直子(以上石棺保存処理)

第2章 古墳をとりまく環境

第1節 地理的環境

奥新田東古墳群は加古川市の北東部に所在し、加西市の南東端と小野市の南西端が接する所に位置している。付近は150m級の山地と細い開析谷とで構成される地形で、谷底の標高は50m程度である。古墳群が立地するのはこの山塊から開析谷にむかって南西方に向広がる扇状地状の麓面である。

付近の地形は、加古川市史によると、山地は北志方から続くものであるが、「開析がより進行し、山地が分断、孤立化している。山地を開析した谷間には谷底平野が複雑に発達し」ており、「その一つが権現ダムの用地となっている。」と解説されている。

また、小野市史によれば、「加古川西岸、加西市域から加古川市域にかけて分布している法華山地の小野市域部分を来住山地と呼ぶことにする。標高は150～180m程度である。小野市域と加西市境界部の種塚山から南に下り、ついで加古川市域との境界部を市域外縁の山地として来住段丘・低地を巡るよう走り、加古川西岸の桑田町まで続く。山地の構成岩石は中生界の火山性岩石であり、この岩石は白堊紀後期に噴出、堆積した流紋岩および同岩質溶結凝灰岩で、一部に安山岩を挟む厚い火碎岩である。山麓には麓面ならびに小扇状地が発達している。麓面は加古川市域のものと同様、最終氷期およびそれ以前の寒冷期のころに形成されたものであろう。」とされ、さらに、「(小野)市域南西部の来住町、福甸町周辺などの平均起伏量110m、平均傾斜18°程度の小山地は、古第三紀火成岩の流紋岩を母材とする山地である。一般に流紋岩類は結晶粒子が小さく、粘土鉱物が生成されやすい。しかも、その粘土鉱物は分散性が高いために容易に雨水に浮泥化して流失し、一部は浸透水とともに下層土に沈積する。したがって、土壤は受食型の土壤となりやすく、粘土質で緻密な土壤となる。また、浸食が進むと尾根や斜面上部など凸部では基岩層の露出する散岩地や強度の受食土となり、谷筋では新生な崩落堆積物による未熟土地帯を形成する。また、流紋岩山地は山麓緩斜面をつくりやすく、それらの地形面には赤色風化の影響を受けた乾性褐色森林土が分布している。」と指摘されているとおり、奥新田東古墳群が立地する麓面には流紋岩あるいは凝灰岩の転石が多く存在し、地山は褐色系の粘質土となっている。また、山地上部にはそれらの岩盤の露頭が多く認められるのである。

第2節 歴史的環境

奥新田東古墳群が存在する加古川市・小野市・加西市が接する地域には、山地や開析谷であるためか、大規模な集落跡は存在していないようである。ここでは、当該地域を中心に、周辺にある各時代の遺跡を大まかに概観し、特に本古墳群と関連する古墳時代の様相を詳述して、本古墳群を巡る環境について述べることとする。

旧石器時代の遺跡は山地部で遺跡ないし採集地が多く認められる。日岡山遺跡、平荘湖遺跡、西山遺跡、宮前新池とその周辺、才ノ木遺跡、岡山遺跡、成井山遺跡、七ツ池遺跡があり、ナイフ形石器などが採集されている。加古川市内の旧石器時代遺跡約40箇所のうち約半数が志方町内に集中している。

小野市域では鶴池遺跡、加西市域では農倉町龜ノ倉遺跡で認められる程度である。

縄文時代の遺跡は、山間地では志方町東中遺跡や加西市の堀山遺跡があるが非常に少なく、低地でも

八幡町宮山遺跡、岸遺跡、砂部遺跡と少ない。小野市域では土器出土遺跡は未発見である。

弥生時代の集落跡は山地間の谷では非常にまれで、低地には多く認められる。前期では砂部遺跡、東神吉遺跡、美乃利遺跡があり、すべて低地である。中期の遺跡は前記3遺跡に加え、岸、溝之口、下村、東中の各遺跡があり、東中遺跡のみ山間地に存在している。中期後半には中西台地遺跡、平山遺跡、八幡町野村遺跡、西条庵寺下層遺跡といった、低湿地でも段丘上に存在するようになる。後期の遺跡では今福遺跡、長砂遺跡、栗津遺跡、北在家遺跡、美乃利遺跡、大日山遺跡、手末遺跡、天下原遺跡、升田



第1図 周辺の古墳分布図

遺跡、岸遺跡、砂部遺跡と数は非常に多くなり、中期後半に比べてやや低い位置に存在するようである。加西市域では当該地域の北方に中期前半から始まる長塚遺跡、土井ノ内遺跡、下宮木遺跡、後期の堅穴住居跡が検出された針田遺跡がある。小野市域では当該周辺地域の明確な弥生遺跡は未発見である。

弥生時代末～古墳時代前・中期の墳墓については、基本的に加古川本流域の低地部に近接した低丘陵上に築かれている。

加古川市神野町の西条52号墓は、弥生時代後期の突出部を持つ斜約15mの円丘墓である。埋葬施設は東西方向に主軸を持つ割石積の竪穴式石室であるが、東辺は石積壁が認められていない。石室下端長辺には1列の割石が存在していた。石室内からは内行花文鏡・鉄劍と壺・高环の破片が出土した。また、墳丘には石室の周りに底部付近に穿孔した盃5個が埋められていた。加古川右岸では加古川市上荘町八ツ塚3号墳が約16×約14mの溝丸方形と考えられており、周溝から弥生時代後期の土器口縁部が出土している。1・2・4号墳も3世紀後半から4世紀初頭に築造されたと考えられている。加古川右岸の旧河道である旧洗川に近接した神吉山には、方丘墓と考えられている5号墳が存在する。墳丘からは庄内期とされる壺口縁部が採集されている。

一方、北方の加古川右岸では、万願寺川との合流地点および万願寺川流域で、いくつかの弥生時代終末頃と考えられる墳墓が存在する。小野市栗生三ツ塚古墳は前期の円墳とされているが、その周辺から庄内期の土器が出土していることから、同期の墳墓の存在が推測されている。加西市域では、堀山遺跡で弥生時代後期の方形周溝墓4基が平成6年に調査され、昭和33年に調査された加西市周遍寺山1号墓は近年の研究の結果、山陰・中国地方で特徴的にみられる四隅突出型墳丘墓に酷似していることが指摘されており、それら地域との関連性を考える上で重要な資料として位置づけられるようになった。

前期古墳のうち、規模の大きな前方後円墳は加古川左岸にのみ認められ、河川に近接した丘陵上に営まれている。

加古川市日岡山古墳群中の前方後円墳は、標高58mの山頂にある日岡山1号墳と、その南東側に合計5基存在する。規模は50~80m級である。4世紀中頃から5世紀前半と推定されている。

1 奥新田古墳群	21 神吉富山古墳群	41 水足古墳群	61 高塚山古墳群	81 西脇南方古墳群
2 野尻古墳群	22 犬穴古墳	42 石守古墳群	62 坊主山古墳	82 西脇北方古墳群
3 大龜谷山古墳	23 錐塚古墳	43 若神社古墳	63 勝手野古墳群	83 一字文字古墳
4 中山古墳群	24 塚山古墳	44 神野二塚古墳群	64 毛無山古墳群	84 岡古墳群
5 上原古墳群	25 山越古墳	45 西条古墳群	65 泰田白雲谷古墳	85 三ツ塚古墳群
6 天坊山古墳群	26 神吉山古墳群	46 西条52号墓	66 泰田稲石塚古墳	86 穂塚古墳群
7 上原古墳	27 鏊山古墳群	47 宮山古墳群	67 泰田高山古墳	87 新池古墳群
8 印南山古墳群	28 平莊湖古墳群	48 成福寺古墳群	68 馬背山古墳群	88 亀ノ尾古墳群
9 小畠古墳	29 カンス塚古墳	49 東沢古墳	69 大谷山古墳群	89 新村古墳群
10 ハツ仏古墳	30 池尻16号墳	50 新池古墳群	70 神子谷古墳群	90 志松ノ尾古墳群
11 広尾二塚古墳	31 池尻19号墳	51 下村古墳	71 カメ焼谷古墳群	91 狀覚山古墳群
12 天神山古墳群	32 升田山15号墳	52 野村古墳群	72 山尾古墳	92 堀山古墳群
13 西中古墳群	33 升田山古墳群	53 下石野古墳群	73 白沢西山古墳	93 周遍寺山古墳群
14 志方大塚古墳	34 天下原古墳	54 正法寺古墳群	74 下来住古墳群	94 八寸山古墳群
15 志方宮山古墳群	35 平山古墳群	55 横山古墳群	75 下来住北古墳群	95 烧野古墳
16 高畠古墳	36 地藏寺古墳群	56 長慶寺山古墳群	76 陣塚古墳	96 後藤山古墳
17 寺山古墳	37 池尻2号墳	57 小野古墳	77 池の内西古墳	97 地蔵古墳
18 石打山古墳群	38 里古墳	58 寺谷古墳	78 岩倉古墳群	98 西笠原古墳群
19 二子塚古墳	39 西山大塚古墳	59 八ツ塚古墳群	79 榎谷古墳群	99 三口北山古墳群
20 宮前古墳	40 日岡山古墳群	60 井ノ口古墳群	80 阿形古墳群	

第1表 周辺の古墳

日岡山古墳群の東には、5世紀前半と推定される西条古墳群があり、全長99mの前方後円墳行者塚古墳をはじめ、帆立貝形の入塚・尼塚古墳が存在している。行者塚古墳は一部発掘調査が行われ、埋葬施設は粘土層で、金銅製帶金具をはじめ朝鮮半島との積極的な交渉を示す遺物が多く出土している。小規模墳では八幡町成福寺古墳群があり、竪穴式石室を内部主体とし、4世紀末～5世紀と考えられている。

西条古墳群のさらに東方、加古川と美嚢川が合流する地点の三木市別所町には下石野古墳群があり、全長86mの愛宕山古墳が唯一の前方後円墳である。詳細は不明であるが、円筒埴輪が出土しており、4世紀中頃と考えられている。当時は交通路として加古川を遡る水路も多く使われていたと思われ、日岡山・西条古墳群とともに川沿いの支配地域を誇示するための橋頭堡と考えられる。

これらは4～5世紀前半までの前方後円墳であるが、加古川右岸にはこれほどの規模のものは見つかっておらず、全長約35mと小規模な長慶寺山古墳があるにすぎない。長慶寺山古墳は昭和30年に発掘されたが不明な点が多く、内行花文鏡などが発見されたが、埋葬施設の構造は竪穴式石室と粘土層の中間形態であり、4世紀代と考えられている。長慶寺山古墳の北西山頂には天坊山古墳があり、昭和44年に調査が実施された。内部主体は2基の竪穴式石室で、内部から獸形鏡・画文帶神獸鏡のほか武器・農工具などが副葬されており、4世紀から5世紀にかけての頃のものと考えられている。

加古川下流域では長慶寺山古墳や天坊山古墳は小規模であり、埴輪や三角縁神獸鏡を持たないことで在地型古墳と呼称され、加古川左岸の日岡山・西条古墳群や下石野古墳群は畿内型古墳として加古川両岸地域を対比させて呼ばれているが、加古川右岸では、栗生三ツ塚古墳が所在する小野市まで範囲を広げて同様に考えることができるであろう。

一方、5世紀前半から後半の加古川右岸では、帆立貝形のカンヌ塚古墳、墳形不明の印南野（池尻）2号墳、6世紀前後では全長約45mの前方後円墳である里古墳や帆立貝形の西山大塚古墳が築かれている。カンヌ塚古墳や印南野2号墳は、韓國大伽耶地域と共に竪穴式石室形態および副葬品配置が認められ、渡來系文物が非常に多く、從来の首長墳とは趣を異にしている。里古墳は竪穴式石室のよう、画文帶神獸鏡が出土しているが、西山大塚古墳は内部の状況が不明である。また、加古川右岸をさらに遡ると、小野市域に5世紀末の阿形山壺塚古墳（阿形1号墳）が存在している。内部主体は竪穴式石室と推定され、変形神人画像鏡と乳紋鏡や三環鏡などが出土している。阿形山壺塚古墳からさらに支流である万願寺川を遡ると、加西市堀山3・6号墳が5～6世紀にかけての小規模な方墳2基であり、主体部は箱式石棺と木棺である。

加古川左岸では5～6世紀前半の古墳は非常に少なく、径40mの帆立貝形（造り出し？）の八幡宮山大塚古墳で推定されているに過ぎない。

さて、6世紀にいたると、埋葬主体に横穴式石室が導入されるようになる。加古川下流域で最も古い横穴式石室で詳細な調査がなされたのは加古川市池尻19号墳と奥新田西古墳、加西市^{こうざい}状覚山4号墳の3基に限られている。志方地域にはもう少し遡る時期のものも存在するようであるが、詳細は不明である。池尻19号墳と奥新田西古墳はTK10～MT85、状覚山4号墳はTK10とされており、6世紀第2四半世紀～第3四半世紀にあたる。池尻19号墳と奥新田西古墳の横穴式石室は穹窿式の名残をとどめているが、玄室平面形は長方形である。

その後の横穴式石室墳は6世紀後半以降、各小地域で群集墳が多く造られ、小規模～大規模の単位群があるようである。加古川左岸には独立墳的に存在する神野二塚古墳、数多く群集する日岡山古墳群や西条古墳群などがあり、少し遡ると正法寺古墳群や瀧山古墳群があるが、加古川右岸に比べて僅少とな

っている。加古川右岸で独立墳として存在しているのは、升田山15号墳、池尻16号墳、二子塚古墳、志方大塚古墳などがある。升田山15号墳は直径35mの円墳で、全長が14.2m、玄室は長さ5m、幅2.3mと長大な横穴式石室を内部主体としている。近接して存在する池尻16号墳（稚児窟）は石室全長が13.8mと、升田山15号墳と較べてやや短いが、玄室は長さ6.4m、幅3mでこちらの方が巨大である。墳丘は一辺40mの方墳と推定されている。石室内には全長2.3mを越す巨大な刳抜式家形石棺が入っていたと推定され、加古川市内最大の石棺である。志方町域の二子塚古墳は直径22mの円墳で、玄室の長さは5.1m、幅1.9mで、石室全長は12m程度である。志方大塚古墳は直径30mの円墳と推定され、石棚をもつ石室で全長8.7m、玄室長4.5m、幅1.6mの規模である。

6世紀後半～7世紀前半にかけての横穴式石室墳は、加古川右岸地域と右岸からさらに奥まった山間地に非常に多く出現するようになる。微視的には平野や谷に面した丘陵や台地上およびその裾に築造されていることが多く、それらをいくつかのまとまりとしてとらえることが可能であろう。すなわち、志方町中心地の盆地状平野の東側山塊と神吉町の平野の北東側山塊、平莊町の谷を中心とした東西両側の丘陵、上莊町の低地北側山塊、小野市黍田町および上莊町白沢の谷の両側山塊、小野市下来住町・来住町の平地と谷南側山塊および谷奥、小野市阿形町・西脇町の平地南側山塊、加西市鶴引町の谷両側の山塊、加西市倉谷町西側の山塊といったまとまりが看取できる。志方・神吉の両ブロックは古墳の数も多く近接して広範囲に築造されており、黍田・白沢ブロックと鶴引ブロックも狭い範囲ではあるが古墳は近接して数も多い。一方、奥新田東古墳群が存在する平莊ブロックや上莊ブロックおよび下來住・来住ブロック、阿形・西脇ブロック、倉谷ブロックでは古墳の数はあまり多くなく、散在する状況である。特に平莊ブロックでは細く深い谷が多いためか、野尻古墳群・奥新田古墳群・中山古墳群・上原古墳群といった古墳群間が1km以上の間隔をおいている。

各古墳群については、詳細な調査がおこなわれたものが少なく、細かな時期別の分布状況を明らかにすることはできないが、中山古墳群が6世紀後半から築造されていることが判明しており、7世紀後半～末に築造された大龜谷山古墳もあり、6世紀後半から長期にわたっているようである。大龜谷山古墳は幅の狭い支谷の最も奥で、少し丘陵に上がった位置にある、いわゆる「山寄せ」の古墳である。前面の谷は途中で屈曲しており、極めて眺望の悪い場所を選んでいる。

その他のブロックでは、黍田・白沢ブロックのうち、勝手野古墳群と毛無山古墳群、カメ焼谷・神子谷古墳群の調査が行われている。勝手野古墳群は7世紀前半～後半にかけて築造され、装飾付須恵器や金銅製馬具などが出土しており、組み合わせ式家形石棺の底石が横穴式石室内より検出されている。組み合わせ式石棺は毛無山3号墳からも出土しており、7世紀中葉～後半の須恵器も出土している。毛無山古墳の石棺内法の長さは約1.1mと小規模である。神子谷古墳群は8基の横穴式石室墳で、石室内に内法長約1mの自然石を組み合わせた小石棺を設置しているものも認められた。この組み合わせ小石棺はカメ焼谷古墳群中からも検出されている。「加古川市史」では両古墳群とも6世紀後半から7世紀前半の間の築造と記述されているが、出土した須恵器は、周辺の須恵器窯跡の調査の結果、神子谷が7世紀後半、カメ焼谷は7世紀末頃の築造と修正されつつある。

刳引ブロックでも、状覚山古墳群が近年調査され、13基が7世紀後半に築造された終末期群集墳であることが判明した。なお、以前から指摘されていた終末期の古墳には地蔵寺古墳がある。切り石を用いた横穴式石室で、7世紀第3四半世紀の築造と考えられている。

いわゆる終末期群集墳について、第4章で詳述する。

一方、加古川中・下流域には「竜山石」製の石棺が非常に多く認められ、石棺仏や碑、手水鉢等に転用されているものが多い。部材の数では、加古川市域で約146例（蓋63、身83）、同様に加西市域では約79例、高砂市域約19例、小野市域約13例である。なお、姫路市域では約70例となっている。竜山石製石棺は長持形石棺と家形石棺に大きく分けることができるが、長持形石棺がすべて組み合わせ式であるのに対して、家形石棺は側抜式と組み合わせ式の両者がある。組み合わせ式は加古川市域では家形石棺の65%であるのに対して、加西市域では家形石棺の約89%もの高率となっている。

また、家形石棺の時期的変化では、7世紀中頃以降小型化してゆくことが指摘されているが、8世紀前半まで存続すると考えられている。加古川市域には小型の石棺が多く存在しており、前項で見たように、7世紀も後半になる古墳の数は少なかったが、小型石棺の量から考えて少なくともそれらのうちの幾つかが付近の古墳から出土しているものと考えられ、古墳の量はもう少し多くなるものと思われる。なお、7世紀後半以降当該地域に須恵器の窯跡が出現するが、あまり規模の大きなものではなかったようである。

参考文献

- ・増田一裕「畿内系家形石棺に関する一試考」「古代学研究」83・84 1977年
- ・『平成7年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996年
- ・『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年
- ・『カンヌ塚古墳発掘調査概要』 加古川市教育委員会 1985年
- ・『奥新田西古墳発掘調査報告書』 加古川市文化財調査報告13 加古川市教育委員会 2000年
- ・『毛無山3号墳発掘調査報告書』 小野市教育委員会 1979年
- ・高野政昭「加古川下流域における首長墓の変遷」「古墳文化とその伝統」 勉誠社 1995年
- ・山本祐作「兵庫県加古川下流域の後期古墳の動向」「古墳文化とその伝統」 勉誠社 1995年
- ・岸本一宏『播磨國風土記と渡来文化』『風土記の考古学』2 播磨國風土記の卷 同成社 1994年
- ・『行者塚古墳発掘調査概報』 加古川市文化財調査報告15 加古川市教育委員会 1997年
- ・『文化財ニュース』No.41, 43 加古川市教育委員会
- ・『大龜谷山古墳』 兵庫県文化財調査報告第212冊 兵庫県教育委員会 2001年
- ・『印南野』(その1・2) 加古川市文化財調査報告3・4 加古川市教育委員会 1965・1969年
- ・『古代の志方(古墳時代)』 志方町遺跡調査報告その2 志方町教育委員会 1976年
- ・『兵庫県史』考古資料編 1992年
- ・『小野市史』第1巻(本編I) 2001年
- ・『小野市史』第4巻(史料編I) 1997年
- ・『加古川市史』第1巻 本編I 1989年
- ・『加古川市史』第4巻 史料編I 1996年
- ・『兵庫県遺跡地図』 兵庫県教育委員会 2000年
- ・『加古川市遺跡分布図』 第2版 加古川市教育委員会 1994年
- ・『小野市遺跡分布図』 小野市教育委員会 1992年
- ・『加西市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』 加西市教育委員会 1997年

第3章 調査の結果

第1節 1号墳の調査

1. 立地および検出状況

1号墳は北東から南西へ延びる尾根の南東斜面上に立地する。墳頂間距離で北東約15mのところに2号墳がある。

現況では東側はため池の造成によって著しく地形が改変されていた。また墳丘北東側半分は後世の里道が通っており、墳丘の大半を削平している。なお、北端には1×2mほどの擾乱坑が存在していた。埋葬施設は天井石、開口部付近の側壁石材が一部露出していることから、横穴式石室であることが想定された。認められた天井石は北東側が石室内に落ち込んでいた。元来もう1石開口部側にあると思われるがすでに消失している。この崩落した天井石から開口部までの間は、側壁材が石室内に落ち込んでおり、盛り土もなくなっている状況であった。また墳丘西側については、現代の炭窯が構築されていたため大きく削平されている。

調査はまず石室内に崩落した石材の除去を行った。磁器碗はこの崩落土中から出土している。崩落した石材を取り除くと、石室内に流入した土壤があらわれるが、この表面上で焼土面および炭の広がりを検出したほか、鉄鍋片、土器皿が出土した。おそらく後世に石室を何らかの目的で再利用した痕跡であろう。

2. 墳丘

現存する墳頂部の標高は57.81mで、北西墳裾部からの比高差約1.7m、南墳裾からの比高差約1.8m、直径約10mの円墳である。ただ、盛り土の流失や後世に受けた削平などのため築造当時の状態を良好にはとどめていない。山鶴は墳丘をほぼ半周して△形に斜面をカットし、周溝を構築している。総延長は約14mにわたり、検出面での幅は最大で3.9mを測る。掘形の断面形は墳裾側が深く掘り込んであるのに対し反対側の肩は斜面の傾斜にすりあうようにしてなだらかに立ち上がる。

腐植土および表土を取り除くと墳丘面が現れる。墳丘は表面を疊を含まないシルト質極細砂で覆って化粧していたようである。墳丘を断ち割って土層を観察すると、厚み5~10cmの小さい単位で盛っている様子が確認できる。用土は、炭などの有機質を含む細砂~極細砂、砂礫を含む細砂~極細砂、砂礫などの混入物を包含しない細砂~極細砂ないしはシルト質極細砂の3つに大別できる。積み上げの詳細な手順については、構築方法の項目で後述する。

3. 埋葬施設

埋葬施設は横穴式石室で主軸をN23.5°Wにとり、南東方向に開口している。開口部付近の壁は上半が崩落していたが、基底石についてはすべて残存しており平面規模を把握することができた。

石材は大きいものと小さいものが混在し、いずれも割石をそのまま積んである。側壁は部分的に立石を配するために不規則な箇所も見られるが、基本的に5段積みになっているものと思われる。ともに5段目については、天井石の架設との関わりから小形の石材を不規則に詰めている状況がうかがわれる。左右の壁を見比べると左側壁が石材の大きさを比較的揃えているのに対し、右側壁では、特に上段にお

いて小さい石材が目立っており、不整な印象を受けざるを得ない。これは後述するように石室の構築順による影響を受けたものと理解される。奥壁には長さ1.8m、幅1.2m、厚さ0.35mの扁平な一枚岩を採用している。天井石は4石が残存していたが、このうち最も開口部側のものは石室内に落ち込んでいた。元来は5石あったものと思われる。最奥の1石を除けば、用いられた石材はいずれも平面は不整な楕円形を呈し約2.0×1.5m、1.5×1.2m、厚みは0.4~0.6mの大きさである。最も奥にかけられた天井石は平面不整な長方形様を呈し、1.5×0.6m、厚みは0.2mとやや小さい石を用いている。

通道部と玄室は明確に区画されない。またこの石室で特徴的なのは、両側壁開口部の石材に立石を用いることである。床面での基底石壁面の通りを見ると、石室中央部で最も広がり、ふたたび開口部に向かってすばまる。渋曲の度合いは緩やかであるが、南西側の壁の方がやや強い。基底石で見ると南西側の壁では開口部の立石が、北東側の壁では開口部側の立石を含む2石がやや内側にはいる。しかし、壁面を見ると両立石が10~20cmほど内側へ飛び出しているほかは、ほぼ面を揃えて積み上げられている。築造の意図としては、向かい合う立石をやや狭めて据えることで、あたかも門のように石室の内外を区画したものであろう。

石室の規模は長さ5.4m、幅は開口部で0.9m、最大幅1.4m、奥壁部で1.0mを測る。高さはほぼ一定で約1.6mである。床面については、ベース面が奥壁から開口部へ向けて緩く傾斜しているため中央より開口部側には貼り床をして水平を保っている。

次に内部主体であるが、石室内には石棺あるいは木棺などは遺存していなかった。ただ石室奥部には長軸方向に1.5m、幅1.0mの範囲で敷石が認められた。石材は凝灰岩で5~20cm大の角礫ないし亜角礫であった。おそらく棺床であり、本来は組み合わせ式の石棺が安置してあったものと考えられる。床面直上に堆積した埋土中から、節理に沿って砕碎した凝灰岩片がいくらか認められた。これらの破片は、明確な加工痕が見られなかつたが、設置してあった石棺が破碎したものかもしれない。

墓壙

石室は斜面を掘り込んだ墓壙内におさめられている。墓壙の規模は底部で幅3m、全長は7mをこえる。検出面からの深さは奥壁部で最大となり約1.2mを測り、開口部では比高差はなくなる。

構築方法

石室と墓壙の平面的な関係を見ると、墓壙の主軸に対して石室主軸は東に約10度振っており、石室が墓壙北東壁に偏って構築されていることがわかる。これは右側壁の外側に石材を積み上げるための作業スペースを確保するためと考えられる。左側壁については石室内に当たる範囲がそのスペースとなる。このことから石室は左側壁の積み上げ作業が常時先行しておこなわれたと考えられる。石室の石材がどのように準備されたかわからない。しかし、仮に準備された石材の量に限りがあるならば、先述のように用いている石材に左右の壁で格差が生じていることは、先行して構築した左側壁が石材を十分に選択する余地があったのに対し、右側壁は限られた量の中からやりくりせざるを得なくなつた結果として理解することもできよう。あるいは、左側壁が直線的に延びるのに対し、右側壁は外湾させて積まなければならなかつたことから、敢えて小さい石材を多用し構築していると解釈することもできる。

さて、石室構築の手順であるが、基本的な工程としては側壁を1段積み上げごとに同じ高さまで土を盛て石室および埴丘を築いていったものと考えられる。4段目まで石室および埴丘を積んだ段階で、5段目の積み上げと天井石の架設をおこなった。このとき盛り土の面は均されて作業の足場として利用されたであろう。天井石を架け終えると裏込めをおこない、上面にも薄く土をかぶせて天井部盛り土の

基礎を固める。その後天井石上面と同じ高さまで盛り土をおこない周囲の墳丘を全て積み上げる。さらには墳頂部に盛り土し墳丘の粗形ができる。最終的に表面に化粧土を施し完成に到る。先述したとおり、盛り土の用土には3種類のものがあり、積み上げの際は異なる種類のものを順に重ねていく傾向にある。ただその順については、部分的に交互に積む箇所もあるが、全体的には規則性は見いだせない。

4. 出土遺物

遺物は石室開口部の崩落土中や二次堆積層の上面で検出された焼土面付近から出土したもの、および床面から出土したものがある。前者は後世に石室を二次利用した際の混入品、後者は副葬品と考えられる。

土器

古墳に伴う遺物は、盜掘を受けているため非常に少なくわずかに須恵器細片が3点出土したのみである。いずれも敷石の隙間や壁際など目立たない場所から検出された。これらの須恵器片はいずれも装飾付須恵器のミニチュア部分の破片と考えられる。1は頸部から口縁部にかけて約1/2の破片である。焼成は良好で内外面共に自然釉がかかっている。緻密な胎土を用いており、色調は灰白色を呈する。形態は頸部上方へ外湾して開き、さらに外側へ屈曲したのちに内側に屈曲する。内側への屈曲部には沈線が1条めぐる。そこから口縁部に至るまでは受け口状に緩やかに内湾して立ち上がる。内外面共にナデで仕上げられる。大きさは口径5.0cm、残存高2.65cmを測る。2のミニチュアと思われる。2は口縁部の破片で約1/5が残存していた。焼成は良好で内外面共に自然釉がかかっている。緻密な胎土を用いており、色調は外面で灰黄色、内面で灰オーリーブ色を呈する。形態は内湾しつつ上方へ緩やかに立ち上がる。破片下端の特徴から上方へ外反しつつや急に立ち上がる頸部が取り付くものと推測される。口縁部外面中央には沈線が1条めぐる。内外面共にナデで仕上げられる。大きさは口径7.0cm、残存高2.0cmを測る。3のミニチュアと思われる。3は坏底部から脚部に欠けての破片である。焼成は良好で内外面共に自然釉がかかっている。現存値で器高2.6cmを測る。8は土箭器の皿である。石室内に2次堆積した層の上面で検出された。この面では一部焼土が広がっており、たき火などの活動をしたことがうかがわれる。口縁から底部にかけての破片である。底部には回転糸切り痕がみられる。10は染め付け磁器碗である。口縁の一部を欠く。石室内に崩落した石材の直下から出土した。底部の器壁が厚く口縁部に向かって徐々に厚みを減ずる。高台は輪高台で底面は露胎する。器面は内外面共に貢入が見られる。口径9.5cm、器高5.2cm、底径3.6cmを測る。

鉄器

石室内に2次堆積した層の上面、8と同様焼土が広がる部分の近くで検出された。T1は鉄鍋の口縁部の破片と考えられる。

5. 小結

1号墳は横穴式石室を主体部に持つ径10mほどの円墳である。北東から南西へ延びる尾根の南東斜面上に立地しており、石室は南東方向に開口している。石室は、袖を持たず羨道と玄室の区別が不明瞭な平面形態をとること、奥壁に一枚岩を用いること、石室開口部に両側壁とも立石を用いていることが特徴としてあげられる。古墳に伴う出土遺物は、石室内より装飾須恵器の破片と考えられる須恵器片が3点見られた。築造の時期はおよそ6世紀末~7世紀代と考えられる。

6. その他の遺構

調査区内では現代の炭窯のほか、土坑をはじめとする遺構がいくつか検出された。いずれも出土遺物を伴わないため、詳細な時期については知る由もないが、少なくとも古墳に伴うものではない。

SK01

2号墳北側の周溝内で検出した。平面円形を呈する土坑で、規模は直径45cm、床面からの深さ約13cmである。掘形の断面は楕円形に立ち上がる。出土遺物は見られなかった。

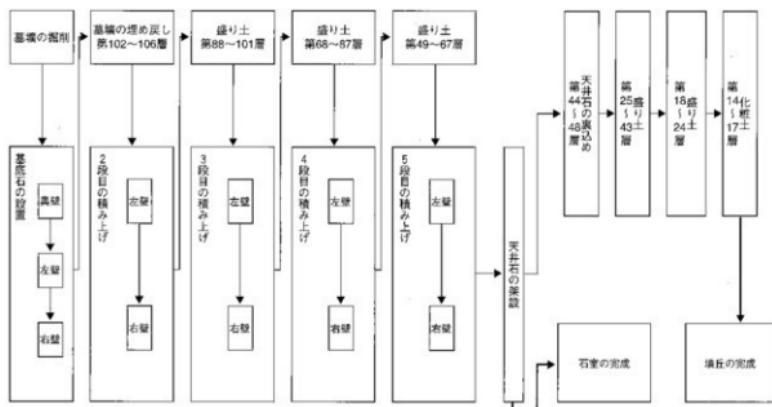
SK03

1号墳北裾の周溝肩で検出した。平面は円形を呈し、規模は直径75cm、床面からの深さ約23cmである。

掘形の壁は直立しており、円筒状に地面を掘り下げる。出土遺物は見られなかった。

SX01

1・2号墳間の崖下で検出した。2段掘りの土坑である。上段の平面形はややいびつな方形を呈し、南北90cm、東西95cm、検出面からの深さ10cmの規模である。下段は上段土坑のほぼ中央に位置する長さ約40cm、幅約30cmのものである。上段底面からの深さは約30cmを測る。この土坑中には10cm大の角礫が無造作に詰め込まれていた。礫と礫の間に隙間があり、多少腐植土が流入していたが、完全に埋積しておらず空洞をなしている。



第2図 1号墳構築のチャートモデル

第2節 2号墳の調査

1. 立地および検出状況

2号墳も1号墳と同様、北東から南西に伸びる幅約40mの小尾根の稜線から約20mの南東側斜面に存在し、1号墳の約15m北東側の斜面上方に位置している。

古墳の南側約3分の1は溜池造成及び後世の土取りによって削り取られ、石室の南西側と石室奥壁部分は炭焼き窯に利用されていたと思われるような痕みが存在していた。墳丘盛土もその多くが削平をうけており、石室北東側の最も墳丘残存状況が良好な部分でも、石室床面から2.2mしか遺存しておらず、1号墳の石室と同様の規模と考えれば、天井石上面までの盛土が除去されていたことになる。また、古墳築造時の石室床面からの盛土高も、1号墳と同様であれば、元来は3m近く存在していたものと類推される。

内部主体である石室も、壁面の石積みは基底石および第2段の一部しか残っておらず、天井石などはすべて抜き取られていることも考えられ、石室内部に落ち込んでいるものは認められなかった。また、石室の南西側壁の端は前述の削平により削り取られていた。

周溝は斜面山側、古墳の北西側を中心に認められ、埋土中に炭が充満している箇所が認められた。また、北東側周溝内から上塙を1基検出している。なお、当初設定した調査区の端よりも2号墳の周溝が山側に広がることが明らかとなったため、北西側に約2mの幅で長さ27.5mにわたって調査区の拡張をおこなった。

なお、墳丘北東側掘の一部に集石が認められた。20個程度の角砾を長方形に並べたような状況であったが、性格等は不明である。また、1・2号墳間の削平後の面には、柱の周囲を石で固めたような施設（S X 0 1）が存在していたが、時期は不明である。

2号墳石室前の削平面上には須恵器杯と磁器碗・ガラス瓶が角砾とともに集積されており、明らかに後世のものであるが、集積の意味は不明である。

2. 墳丘

墳丘は後世の削平等により、かなり改変を受けていたが、腐植土や後世の埋土等を除去してゆくと、墳形や周溝は意外にも明確に判断可能な状況で残存していた。ただし、葺石・列石等の外部施設は認められなかった。

調査前の最高部の標高は58.95mで、墳丘残存部の最高所標高は57.87mである。石室の主軸に合わせて墳丘を切ったラインでの墳丘残存状況のデータは、北西墳掘からの比高差は約1m、北東墳掘からの比高差は約1.5mで、ちなみに墳丘東端掘から最高所までの比高差は約2.7mである。

墳形は、調査前の等高線の形状を観察すると、方墳と判断できる状況であったが、墳丘残存状況の地形測量図では、方形を呈さず、むしろ円墳に近い。しかし、墳掘の整形ラインや斜面上側にある周溝の形状からは方墳に近い。ただし、墳丘盛土除去後の地形では、円形を意図しているようにも看取できた。ここでは、墳丘盛土は後後に削平・流出することが多いことから、墳掘整形を重視し、方形を意図していたものと判断しておき、終末期古墳の墳形には方形が多く認められることを付記しておく。

方墳とした場合の墳丘規模は、石室主軸方向で10.7m以上、同直交方向では一辺11.6mを測ることとなる。

墳丘盛土は古墳北東半分で詳細に観察することができた。墳丘の大半が盛土によるもので、周溝部分は上端幅約4m、下端幅約2mで、約40cmの深さに掘削し、墳丘の基盤部分を形成している。盛土はこの掘削土を利用しているものと思われる。

地山整形後、石室を構築するための墓壙を掘削し、石室と墓壙との間隙を裏込め土で埋めながら、石を積み上げていったようである。石室に近い部分は比較的小さな単位で盛土を行い、基本的に褐色系の粘質土と黄色・褐色の中間系の礫混じり砂質土を交互に積めながら積んでおり、それらは旧表土と地山掘削土を利用している。石室から離れた部分の盛土は単位がやや大きく、比較的柔らかく、積んだのちにあまり締めていないことが推察される。基本的には墳丘内の外側から先に積んで、内側へ乗せてゆく盛土方法を探っている。

一方、平面的には、全体を一定の高さで揃えながら盛土をおこなっていたようで、土層断面において、石室裏込め土から墳丘外端までほぼ一直線に繋がるラインの上下で、積んでいる土が異なっている部分が存在する。これらは3~4面分認められ、3~4回に分けて、ほぼ平坦にしながら積み上げていることが理解できる。これらは石室石材を積む段数と関連があるのかもしれない。

斜面山側の周溝はほぼ凸形を呈し、墳丘の山側3分の1を囲むだけで、墳丘全体には及んでいない。ただし、墳丘の西側から西南にかけては徐々にその幅を減じるが、そこから南側への続き方、あるいは収束の仕方については、墳丘のみならず地山までもが大きく削り取られているため、全く不明である。また、東側についても、後世に烟として利用されていたようで、周溝が削平を受けたことは否めず、古墳築造時に、周溝がどこまで存在していたかについては、確定できない。

周溝の上面幅は約3.5~4.1m、下端幅は約1.5~1.9mで、周溝埋土には明黄褐色系で細礫を含む極細粒砂や黄褐色系で細礫を含んだシルト混じり細粒砂が堆積していた。

周溝の掘削は、墳丘側は上下端が明瞭な法面を呈するのに対し、斜面山側は緩やかにその深さを減じ、地山表面にすりあうように仕上げている。

また、周溝西端のコーナー部分には幅1.3m、長さ5m、厚さ13cmにわたって木炭の集中部が認められた。木炭は、周溝埋土の黄褐色系細粒砂層と明黄褐色系極細粒砂層の間に挟まれた状態で検出されたが、その時期や意味するところは不明である。ただし、周溝埋土の最上面ではないことと、周溝底面に接していないことを考え合わせると、周溝掘削後、土砂が約10cmの厚みに堆積した時点であることが判る。

3. 埋葬施設

石室 2号墳の埋葬施設も1号墳と同様、両袖の横穴式石室であり、その主軸はN42°W、開口方向はS42°Eで、1号墳の開口方向よりもさらに東に約18°振っている。

前述のように、2号墳の石室は破壊が著しく、天井石は全く認められず、左右の両壁も1~2段、最も多いところでも3段（高さ約1.1m）しか残っていないかった。石室羨道部分も大きく削り取られており、石室残存長は4.6mを測る。両袖で、両壁面には立石があり、袖石と認識できる。ただし、この袖石が僅かに内部にせり出すのみで、玄門部としての狭まりは非常に少なく、玄室幅と羨道幅は殆ど変わりがない。

玄室側壁は3石で構成されており、長さは2.65m、奥壁際での幅は1.05m、玄門付近では1.39mとこの部分がもっとも幅が広い。基底石は幅1m程度、高さ90cm程度の比較的大きな石を使用しているが、床面から上へは80cm程度が露出している。2段目以上は、基底石とあまり変わりがない幅の石を平積みに

しており、高さ20cm程度となっている。奥壁は床面からの高さが1m程度の一枚石のみが残存していた。玄門幅は1.11mで玄室奥と同値である。

袖石は高さ1.3m、幅30cm程度の石を立てている。羨道部分は袖石を除くと、3石のみ遺存しており、羨道長は袖石を含め、2.09mで、幅は1.24mである。基底石のみ遺存していた。

墓壙 石室構築のための墓壙は平面「コ」字形で、長さ5.7m、幅3.74m、奥壁付近での深さは90mであるが、地形の傾斜に合わせて、石室前面部分に向かって徐々に高さを減じ、自然消失している。2段に掘っている部分があり、基底石を安定させるための掘え付け穴を穿っている部分が多い。

2号墳の石室の形状は、袖石までの玄室長こそ違え、1号墳同様石室壁が弧状を呈し、「胴張り」に近い状況であること、石室の幅がほぼ同規模であることから、破壊された2号墳の石室も、床から天井までの高さが約1.6mで、壁の石は4～5段積みであったことも類推される。ただし、2号墳の奥壁は最低でも2段積みとなる。

しかし、一方で、石室石材の使用方法を観察すると、2号墳の2段目以上が幅20cm程度の石を横積みにして使用しているのに対し、1号墳のそれは幅30～40cm程度であり、使用石材の幅にかなりの違いが認められる。また、基底石も1号墳に比べて薄い石材を立てて使用していることも、違いとして挙げられるであろう。このことは、比較的薄い石を使用している2号墳の石室高が1号墳よりも低かったことを示唆しているとも考えられる。しかも、天井に石を乗せることを意図せず、他の天井材（木材等）であったり、あるいは天井が無かったことも可能性として挙げられるであろう。

小石棺群 石室内には9基の埋葬施設が認められ、組み合わせ式家形石棺と、自然石を利用した組み合わせ式石棺に大別できる。組み合わせ式石棺の最も大きいもの（1号棺）が玄室奥壁寄りに構築され、家形石棺底石（2号棺）は玄室の羨道寄りに安置されていた。その他の組み合わせ式小石棺は、1・2号棺および石室壁面との間に設置され、1・2号棺の側石や石室壁面を長側石として利用し、短側石を立て、割石の底石を敷いたもので、短側石も隣接棺と共用している。それらは、1・2号棺と石室西側壁との間の4棺（6～9号棺）、2号棺と石室東側壁との間の2棺（4・5号棺）、1・2号棺間の1棺（3号棺）である。羨道部分にはもう数基あったと思われる。小石棺の規模は長さ40～80cm、幅20～40cm程度である。検出当初は1号棺側板支えの石と考えたが、底に上面平坦な石を敷いていることから、非常に規模は小さいが、小石棺と判断した。

1号棺 玄室最奥中央に設置された、自然石を使用した組み合わせ式石棺である。石室壁面との間隔は20～25cmで、本石棺の上には蓋石となる位置に2石が存在していた（写真図版14）。石室奥側の石は奥壁と同じ石材で、風化が著しく、バラバラであった。調査時点では位置や石材から、奥壁が割れて落ち、たまたま石棺の上に乗ったものと判断できる状況であった。また、玄門側の蓋状の石は、その上面が山形を呈し、偏平な石でなかったことと、1号棺東側石にはほんの少しかかっていたのみであったため、石室側石が転落したものと判断した。調査時点では以上のようない由から蓋石ではないと判断したのであるが、現段階では奥壁側はともかく、玄門側については蓋石と考えても良いようにも思われる。

四方の側石はすべて1枚石で、底石は基本的に2枚で構成されている。側石や底石の隙間は小螺で埋められている。1号棺の内法は、底付近での長さ96cm、奥壁側での幅は35cm、玄門側での幅48cm、深さ35cmである。この長さでは、成人は伸展葬では入らず、折り曲げる等の必要がある。

石棺内部は土が充満しており、奥壁側に向かって傾斜する形で3層に分層できた。すべて炭を含む層で、最下層は暗灰黄色で灰に炭が混じった状態であった。上部の層は黄色が強く、炭・灰とも含まれる

量は少なくなっている。1号棺内からは遺物は出土しなかった。

2号棺 2号棺は、玄室内玄門付近の石室中央に安置された、組み合わせ式家形石棺で、底石のみ遺存していた。凝灰岩製で、いわゆる「竜山石」製品である。「竜山石」は流紋岩質溶結凝灰岩とも称される。上部を失った状況では、棺として使用されていたことを確実視することには躊躇するのであるが、底石以外に小片ではあるが、短側石と考えられる破片が出土していることから、元は側板等があったものが後後に破壊されたものと考えておきたい。

安置された家形石棺の、石室壁との間隔は北東壁で40cm弱、南西側で30cm程度、1号棺との間隔は35cm程度である。1号棺と同様、ほぼ等間隔に空間が開くように置かれている。

石棺底石には長側石をはめ込むための溝が彫り込んでおり、短側石が乗る部分は表面の加工が丁寧におこなわれている。これによって、石棺側石や蓋石は出土しなかったものの、石棺の内法がある程度推測できる。すなわち、石棺側石で囲まれた石棺内法の長さは、両端でそれぞれ77cmと75cmで、幅は43cmと40cmであることが推定できる。ただし、高さは不明である。

2号棺は側石が立った状態で遺存していたわけではないので、埋土は石室内全体を覆った土層と同じであり、特に炭・灰等が集中していた状況は認められなかった。また、棺内遺物は全く出土しなかった。

3号棺 1・2号棺間にあり、自然石を使用した組み合わせ式小石棺で、東西に長い。西側に短側石を立て、東側は石室壁をもって短側石に見立てているようである。底には上面が平坦な石を数個敷いている。中央部での内法長は90cm、幅は約30cmで、深さは20cm前後である。棺内からは遺物は出土しなかったが、東側底石の直下から土師器杯が出土している。ただし、この土器は、出土位置などから、3号棺ではなく、1号棺に伴うものと考えておきたい。

なお、調査過程で、3号棺の北東部には蓋石と考えてもよいような石が存在した。この石は上面も平坦でやや偏平な石であった。3号棺の蓋石であった可能性が高い。

4号棺 2号棺の北東に接して作り付けられた組み合わせ式小石棺で、短側石は自然石を立てているが、家形石棺の長側石と石室側壁を長側石代わりに利用している。内法は、長さ63cm、幅35cmである。深さは23cmで、底は上面が平坦な石を数個使用し、隙間を小砾で充填している。底は水平ではなく、石室奥壁側が玄門側よりも8cm高くなっている。なお、奥壁側の短側石は3号棺の長側石と、玄門側の短側石も5号棺の短側石と兼ねている。石棺内より遺物は全く出土しなかった。

5号棺 4号棺の南東側にある、自然石の組み合わせ式小石棺である。北西側短側石は4号棺南東側短側石と兼用している。南西側長側石はすでに存在していないが、北東側長側石は石室壁と兼用している。内法の長さは75cm、幅約50cm、底は上面が平坦な石を3枚敷き、隙間を小砾で充填している。石棺の深さは北西側で20cm、南東側で15cmである。底は北西側が若干高く、その差は2cmである。遺物は出土していない。

6号棺 6～9号棺は石室南西側壁に沿って一列に並んだ自然石を使用した組み合わせ式小石棺で、短側石をそれぞれ隣り合わせの石棺と共用している。

6号棺は、1号棺の南西側に接しており、長側石は1号棺と石室壁面のものを兼用している。短側石は自然石を立てており、南東側の短側石は7号棺のそれと兼用している。北西側短側石は黄色系の土で非常に硬く固められていた。内法は、長さ76cm、幅28cm程度で、深さは北西端で25cm、南東端で17cm、底はほぼ水平であるため、短側石の高さの違いによって深さに変化が生じている。底には上面が平坦な5個の石を並べている。棺底のレベルは1号棺よりも10cm高くなっている。遺物は出土していない。

7号棺 6号棺と北西側短側石を共有し、8号棺と南東側短側石を共有する、自然石を使った組み合せ式小石棺で、南西側長側石は石室壁面と共有、北東側長側石は1号棺長側石・3号棺短側石・2号棺長側石の一部と共用する。南東側短側石が内方に傾いているが、垂直に立てた場合、石棺の内法は、長さ78cm、中央部での幅24cm、深さは中央部で20cm、短側石際で25cmであり、深さの差は側石の高さに影響されている。底面は上面が平らになるように比較的小さな疊を敷いているが、隙間が多い。底面は、石室奥壁側が南東側に比べて5cm高くなっている。棺下より土師器杯片が出土している。

8号棺 2号棺と石室南西側壁との間に作り付けられた、自然石を使用した組み合せ式小石棺である。長側石は2号棺・石室側壁と共に用いている。短側石は自然石を立て、7号棺・9号棺と共に用いている。両短側石はどちらも石室奥壁側に斜めに倒れている。底石は3石程度の偏平な石を敷いているが、隙間が多い。底のレベルは、奥壁側が玄門側に比べて5cm高い。内法の長さは50cm、中央部での幅は20cm、短側石を起こした場合の深さは、石室奥壁側で32cm、玄門側で25cmであり、短側石の高さに左右されている。遺物は出土していない。

9号棺 8号棺と北西側短側石を共用し、北東側長側石の約半分を2号棺と、南西側長側石は石室壁と共に用いる、自然石を使用した組み合せ式小石棺である。北西側短側石は北西方向に傾いている。南東側短側石は北西側短側石よりも、1.5倍以上の幅広の石を使用しており、9号棺のさらに南東側にもう1基小石棺が存在することを彷彿とさせる大きさである。

9号棺の内法は、長さ40cm、幅20cm、北西側短側石際での深さは26cm、南東側短側石際での深さは36cmである。深さの差は、短側石の高さに左右されている。棺底は偏平な石を4石程度敷いているが、隙間が多い。底の高さは、玄門側が1cmだけ低い。遺物は全く出土しなかった。

なお、9号棺の南東側に上面平坦な疊が存在していることと、先にみた短側石の大きさから、ここも小石棺であった可能性が高い。

以上、6～9号棺までの中石棺では、底のレベルが、6号棺の石室奥壁側が最も高く、9号棺の玄門側が最も低いことが特徴としてあげられる。2.7mの距離で、その差は最大で23cmである。また、6号棺底の高さは1号棺底よりも10cm高いが、9号棺底の高さは2号棺底よりも10cm低くなっている。ちなみに、1号棺と2号棺の底のレベル差はほとんどなく、2号棺は奥壁が玄門側に比べて5cm高いが、2号棺玄門側と1号棺の底のレベルが同一で、むしろ、2号棺の奥壁が1号棺の底よりも5cm高くなっている。

また、これらの中石棺は、1・2号棺も含め、成人を伸展葬するには不可能な大きさであり、当時の埋葬方法のなかで、このような小規模の石棺が出現していることについて注意しておく必要がある。

4. 出土遺物

2号墳関係で出土した遺物には、3号棺下から出土し、1号棺に伴うと推定される土師器杯4と、7号棺下から出土した土師器杯5、崖下の磁器・ガラス集積部より出土した須恵器杯7、磁器碗11、東側墳裾の埴丘出土内の須恵器碗(6・9)のほか、組み合せ式家形石棺の底石および短側石片がある。

4の杯は、橙色を呈し、平らな底部から大きく丸く屈曲してほぼ直立した口縁部となる。口縁端部は内側に屈曲する。外面調整は口縁部下半と底部は横方向の箝削り、内面は二段放射紋を施しているようであるが、断定できない。口径は16.7cm、器高5.75cmである。飛鳥・藤原宮跡の杯AⅠにあたり、口縁端部の特徴からは飛鳥・藤原宮編年第Ⅳ期、径高指数(器高/口径×100)=34であることから、第Ⅲ～Ⅳ期の中間にあたる。口縁部の厚みや口縁端部の形状、体部から口縁部へかけての変化および径高指数

を総合すると、飛鳥第Ⅳ期に位置づけておくのが妥当と思われ、実年代では7世紀第4四半世紀が与えられている。

5の杯は口縁部のみであるが、口縁端部の屈曲部分が4にくらべて小さいものの、杯Cあるいは杯Aで、口縁部は僅かに屈曲する。口縁部外面はミガキ、内面は放射紋と思われる。口径は11.6cm、器高は不明である。形態の特徴から、飛鳥・藤原宮編年の第Ⅲ～Ⅳ期にあたると思われる。

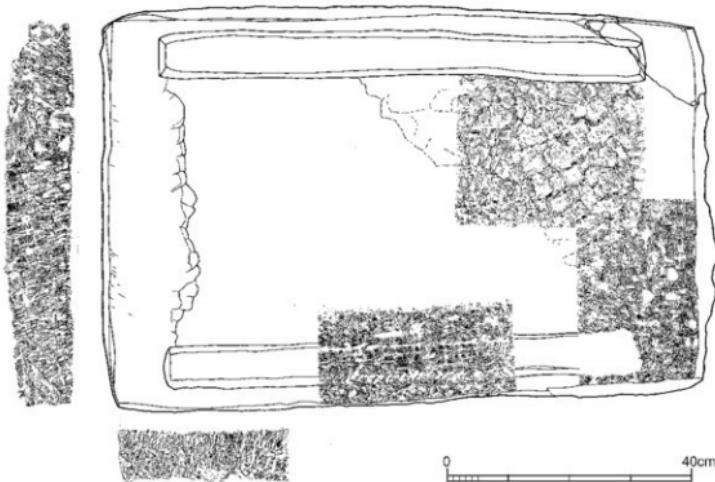
7の須恵器は杯Gあるいは蓋と考えられるもので、口径10.8cm、現高3.75cmで、口縁部は体部から屈曲して外反しながらほぼ垂直に立つ。底部外面は鋸切り。形態の特徴から陶邑編年のTK-46型式あるいはTK-48型式に近く、本古墳群とは直線距離で4km未満という、白沢2号窯出土土器に近い形態である。白沢2号窯は水井編年ではⅢ期1A小期で、飛鳥Ⅲと併行し、TK-217型式新段階に位置づけられており、ここの單一土器での判断とは齟齬が生じている。TK-46～48型式は7世紀の後半に位置づけられ、飛鳥Ⅲは7世紀第3四半世紀にあてられている。概ね4・5の土師器と同年代を示すことから、7についても、近～現代のものと同じ場所に集積されていたものの、出土場所が石室のすぐ前であったことから、本来、2号墳に伴っていたものと理解しても無理はない。

11の磁器碗は口径8.2cm、器高5.4cmで、外面に鮮やかなコバルトブルーの発色で花紋を描き、口縁端部外面と輪高台の周間に團紋を描いている。明治以降と思われる。

6の須恵器は口径10.9cmの杯あるいは椀であるが、詳細は不明である。

9の須恵器碗は平安時代～鎌倉時代のもので、口径18cm、焼成良好で白っぽい。

組み合わせ式家形石棺底石は、最大長100.2cm、上端面の長さ95.8cm、最大幅65.8cm、上端面幅63.4cm、厚さ12cmで、1枚の板石である。重量は114kgであった。横断面の形状は中央がやや膨らんだ形で、両端との厚みの差は3.6cmである。



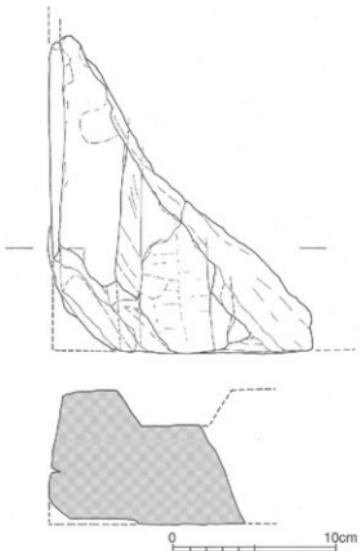
第3図 2号墳出土家形石棺底石拓本

上面には長側石をはめ込むための溝が彫り込まれており、その長さは78cmと79.2cmで、長さはほぼ同じ、溝上面が広く底が狭い形状も同じで、その横断面形は逆台形を呈する。溝内表面には工具痕が顕著に認められ、法面部分の加工は斜めに削っている様子が窺える。一方、短側石が乗る部分は工具で削って平坦にしており、それ以外の部分では基本的に表面を叩くことによって平板にしているが、一部削っている箇所も認められる。短側石が乗る部分の加工は、石棺長辺にまで及び、棺内は長側石を乗せるための溝の端と同じか若干内側まで施してあることから、短側石が長側石を挟み込む形で組み合わされるものである。組み合わされた石棺の内法は、幅43cmと40cmで、高さは不明である。

石棺底石側面の加工・調整は、すべての面で若干右下がり方向に削っており、その工具痕跡が顕著に認められる。また、底面については、全く加工を施していないように思われ、削り取ったままの状態と思われる状況である。摺理面できれいに分かれる石材を採用していると思われ、石材を詳細に見ると、直径5mmまでの岩片が面的に層状をなして認められることから、平板に削り取ることができる石材を利用している。また、石棺の全体形状は、底面が広く上面が狭い截頭四角錐であることから、内面が上の状態で石棺の大きさを決め、周囲に溝を切り、起こし取ったものと思われる。底石の長側下端には、幅約5~8cm程度で、約2~6cmの間隔をおいて浅い長方形の窪みが存在することから、近世の「ヤ」のような道具を使って削り起こした可能性がある。ただし、この痕跡は本石棺で観察したのみであり、今後他の石棺についても観察する必要がある。

組み合わせ式家形石棺短側石は、破片であるが、幅7.5cmの溝が端まで彫り込んであることから、短側石と判断した。石棺としての組み合わせ方法は、長側石を短側石が挟み込む形である。短側石の厚さは8cm、端部の直交する2辺が残存しており、縦19cm、横16cmの長さが遺存している。溝が端まで延び

ており、上端あるいは下端のどちらかにあたる。ここでは下端としたが、特に理由があるわけではない。長側石をはめ込むための溝は、深さ2cm、底幅4.5cmで、長さ13cm残存していた。内面になる面と端面は削りなどの加工が施されているが、外面は自然剥離面で、石材を切り出したまま調整はおこなっていないようである。端面と平面との境は稜を持っていて。溝の幅から、長側石の厚みは7.5cm以上、石材は底石と同様、岩片を含む層が面的に間にに入る凝灰岩で、層状剥離をするものである。隙間が多く、軽い石材であり、溝から外側は幅4cmの余分があることから、底石の溝幅から復元した短側石の幅は、61cmまたは66cmとなる。なお、底石の溝の途切れから短側面までの長さは9~10cmであり、短側石の厚みが8cmであることから、1~2cm幅の余裕を持って短側石が底石上に乗ることがわかる。



第4図 2号墳出土家形石棺短側石

5. 小結

2号墳は、1号墳の北東側に周溝を接して存在し、横穴式石室を内部主体とする古墳である。

墳丘は溜池や炭焼き窯などによって大きく改変を受けていたが、墳形は方墳と考えられる状況である。石室も上部が破壊を受け、2段程の石積みが遺存していた程度であった。墳丘高は1号墳と同様に石室高が1.6mと仮定すると、2号墳の墳丘高ももう80cm程度高かったことになる。しかし、石室壁の石積みが2段目以降幅20cmという幅の狭い石材を横積みに使用していることから、あまり高くなない石室を考えるほうが良いのかもしれない。その場合組み合わせ式石棺の蓋石の上を覆う高さが最低限と考えられる。そうすると、推定される石室の高さは1.2m程度と思われる。また、石室天井石は内部に落ち込むことなく、周辺にも残存していなかった。1号墳の天井石が良好に残存していたに比べ、すぐそばの2号墳に全く認められないということは、2号墳にははじめから天井石がなかったことを示している可能性も考えられる。ただし、天井は石以外の材質も考えておく必要がある。つまり、天井が存在していたか否かという問題と、天井があったとすれば、その材質は何かという問題との違いがある。ここでは判断は避け、問題提起に止めておきたい。

内部主体の横穴式石室には明確な袖部は持たないが、あたかも玄門の袖石のように、両壁には立石が存在している。また、この立石から石室奥側に1・2号棺が配置され、玄室であることを意識しているようである。ここではその情況を重視して、両袖の石室と考えておきたい。ただし、袖の突出度が非常に少なくなっており、時期的に新しいことから、終末期両袖式石室と呼称しておきたい。

埋葬施設の石棺群は、残存していたもので9基あり、それらのうち中央に配置され、規模の大きなものは、1・2号棺である。残りの3～9号棺の7基は、短側石あるいは長側石を他の棺や石室壁と共に、単独では棺として成り立たない。すべて底石を持つが、内法の長さは最も大きいもので、1号棺の96cm、最も小さいものは9号棺の40cmである。幅で最も大きいのは5号棺の50cm、最も狭いのは8・9号棺の20cmである。深さでは最も深いものでも36cm（9号棺）、浅いものは3・5号棺の20cmである。いずれも成人を伸展状態で埋葬するには不可能な大きさで、これらの棺にどのように遺体をいたれたかについて考えることは重要な事柄である。なお、1号棺の内部に炭と灰が詰まっていたことは大きな示唆を与えるものと考えられる。

一方、組み合わせ式家形石棺は底石全体と短側石の一部が出土したのみであるが、竜山石製で、層状堆積の岩盤を探査し、加工したものである。このような細かい層状堆積を示す凝灰岩盤が露出している場所は、管見では、加西市の高室が代表としてあげられ、南方の加古川・高砂市域の竜山石は細かい層状堆積は示さない。このことから、竜山石分布範囲でも北部の石材を使用した可能性が高く、板状剥離がしやすい北部竜山石が組み合わせ式石棺材として利用されていることが考えられる。したがって、加西市域に存在する家形石棺の約9割が組み合わせ式石棺であることは、その石材産地に近いことを裏付けていると思われる。

2号墳の理葬時期は、その出土土器から、7世紀第4四半世紀に位置づけることができ、終末期の古墳形態を知る上で貴重な資料である。

第4章　まとめ

第1節　奥新田東古墳群の特徴

奥新田東古墳群はその出土土器などから、1号墳が6世紀末～7世紀代、2号墳が7世紀後半～8世紀初頭に築造された古墳であると判断されたが、1号墳から出土した装飾付須恵器は、石川県谷崎横穴出土の子持台付長頸瓶に見られるように、7世紀にも装飾付須恵器は存在していることから、1号墳の時期に幅を持たせた。次にその時期を考える上で、1号墳石室の形態について類例を探ってゆくことにする。つまり、1号墳石室の一つに、石室前面に立石の存在があり、周辺で立石をもつ横穴式石室を求めてみると、加古川市中山1号墳や同市池尻16号墳、升田山15号墳がある。また、加西市状覚山10号墳、中町東山15号墳も同様の特徴を持つ。管見では加古川右岸流域にのみ認められるが、特に東山15号墳を除いた加古川下流域に集中しているようである。なお、ここで立石として扱ったのは、石室壁の2段以上の高さを持つものに限っている。これらのうち、中山1号墳、升田山15号墳、池尻16号墳、東山15号墳は両袖式の石室で、袖石も立石である。中山1号墳は遺物が出土していないため、時期が不明であるが、升田山15号墳と池尻16号墳は6世紀後半に位置づけられている。一方、東山15号墳は7世紀中葉と新しい。状覚山10号墳については、7世紀後半と最も新しく、奥壁石材の大きさが違うものの、無袖の石室であることや石室幅・長さの点で奥新田東1号墳に最も類似し、時期的にも近いものと考えるべきと思われる。そうすると奥新田東古墳群は1・2号墳とともに7世紀後半に築造された古墳群であることをなる。さて、奥新田古墳群には西古墳も存在するのであるが、西古墳については加古川市教育委員会が平成8年度に発掘調査を実施し、穹窿式石室の系譜を引く横穴式石室で、時期も6世紀後半（第3四半世紀）であることが判明した。奥新田東古墳群とは時期が全く異なることから、別の古墳群として扱うべきと思われる。

次に奥新田東古墳群の2古墳の諸特徴を挙げると、墳形は1号墳が円、2号墳が方形を意識、石室は1号墳が無袖であるのに対して、2号墳は袖を意識して石を立てている。石室内は2号墳が玄室内に埋葬施設が非常に多く存在するのに対し、1号墳では玄室中央に1基のみ推定される。

1・2号墳の周溝が重複する部分では、土層の観察では1号墳の周溝が2号墳のそれを切り込んでいるように観察できた。しかし、現在他の要素で1・2号墳の築造時期を比較したところ、2号墳が1号墳に後出すると考える方が自然である要素が多いことは否めない。

ただし、1号墳から遺物が断片的にしか出土していないため、他の要素で推定せざるを得ないが、石室形態や立石の問題など、比較するにも資料が少なすぎる状況のなかでは、それも難しい。今後の課題としておきたい。

第2節　石室内に小型石棺を内蔵する古墳について

奥新田東古墳群はその出土した土器などから、7世紀も後半に築造された古墳群であることが判明した。従来は、7世紀の前半には古墳の築造（造墓期）が終了し、追葬期に入るとされていたものが、近年、本古墳群のように、7世紀も後半に入ってなお、古墳が築造され続ける例が多く発見されるようになった。しかし、これらの古墳群にはそれまでの横穴式石室とは違って、縮小あるいは簡略化した石室

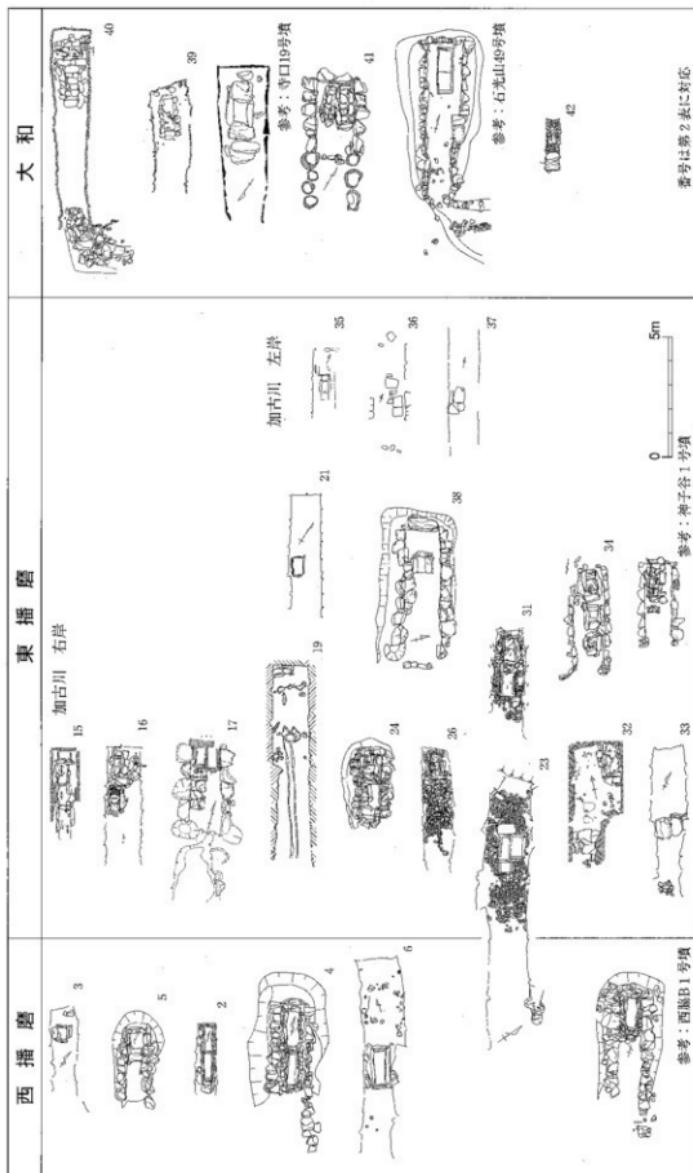
に移り変わっていることが窺え、小石室や石棺、小竪穴式石室等と呼ばれている。これらのなかにあって、奥新田東2号墳のように大人が伸展葬では入りきらない大きさの石棺が検出されることもしばしば認められる。本節では、奥新田東2号墳のように横穴式石室内に小石棺を内蔵する古墳の類例を求め、その意味を知る上で、本古墳の位置づけを行う。ここでは、大人の伸展葬が不可能な大きさに注意して、長さ1.5m以下のものについて小型石棺とし、管見で諸例を集めたのが第5・6図、第2表である。

さて、2号墳と同様、小型家形石棺を内蔵する横穴式石室墳には加西市大内町のヤクチ4号墳がある。石室は長さ10.7mと推定され、組み合せ式家形石棺は玄室内中央の石敷上に安置され、側石が倒れ、蓋石が底石の上に乗った状態で検出された。石棺の内法は78×37cmであり、奥新田東2号墳とはほぼ同規模である。石棺が置かれた詳細な時期は不明であるが、石室が築かれ、利用されたのはTK43（6世紀後半）～TK217（7世紀前半）型式の間である。小型家形石棺については岡壁氏が詳しいが、家形石棺のうち、横穴式石室内に収められ、長さ1.5m以下の小型のものはほかには無いようである。

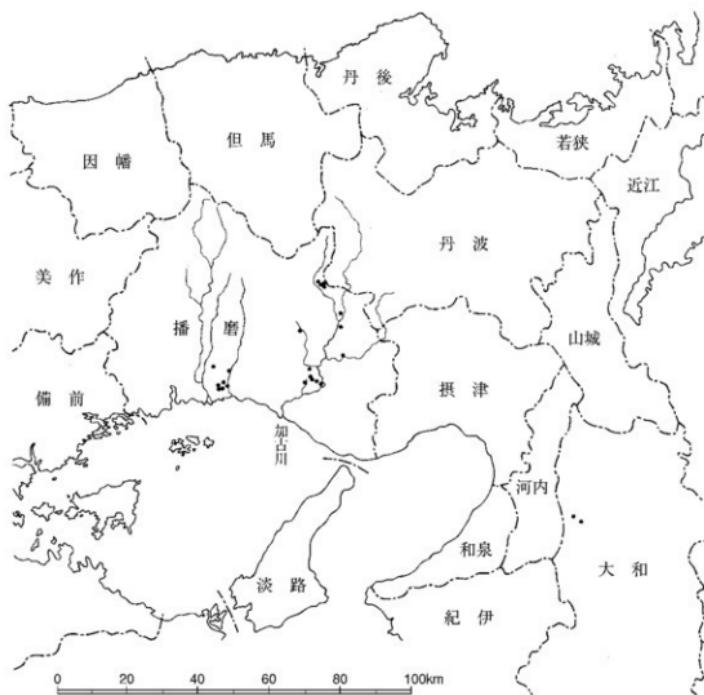
兵庫県内では、切石以外の小型石棺が横穴式石室内に置かれる例は加古川流域に多く認められるようであるが、西播磨にも存在する。西播磨では姫路市西脇古墳群中の4基に認められ、長さ1.5mを少し越えるものは2基存在する。A支群24号墳とB支群8号墳では2棺が直列する。B8号墳2号石棺内から刀子が出土し、底は炭敷であった。B52号墳石棺からは耳環2と棺底に炭・灰混じりの土が認められた。B4号墳石棺内でも炭敷があり、耳環が1点のみ出土している。時期は飛鳥II～III（古）（7世紀第2四半～第3四半の前半）に収まり、やや古い傾向を示す。姫路市下古墳群中には2基存在し、5号墳は棺内に約5cmの厚さの炭層が認められた。出土須恵器からTK217型式の新段階と考えられる。山頂9号墳の詳細なデータは不明であるが、2棺が直列し、棺内に炭層があるものや成人女性の腕と足の骨が並べられていたものがある。姫路市下野古墳群では、時期不明であるが、12号墳に2基の小型石棺、14号墳では長さ1.7mの石棺が安置されていた。姫路天神山古墳群では5～7号墳の3基において認められたが詳細不明である。そのほか前山古墳群、朝日山古墳群、檀特山古墳群中に存在するようだが、規模・時期などの詳細は不明である。太子町域では原・北町古墳で玄室内に4基の石棺が存在していた。

東播磨では加古川中・下流域に存在し、北方では多可郡中町に目立って多く存在している。女夫岩古墳群中1号墳の石室内には4棺が並び、すべての棺から人骨が検出され、第1主体は熟年男性と推定されている。2つの棺からは刀子、1棺の埋土には炭が認められた。2号墳は2棺が直列し、両方から人骨が出土し、第1主体からは耳環2点が出土している。出土土器から7世紀後半と推定できる。石垣山2号墳では玄室（？）奥壁に接して2棺が並列しており、それぞれ金環1と棺底には炭が混じっていた。出土須恵器からTK217型式と考えられている。東山古墳群中12・13号墳の2基の石室中に小型石棺が認められ、12号墳の石棺からは2体分と推定される人骨と刀子2・耳環1が出土している。入角古墳群は82基からなるが、そのうち23基が調査され、十数基に石棺が認められるという。報告書が未刊行であるため詳細は不明であるが、断片的に公表されているものから、1～3基の石棺が横穴式石室内に直列あるいは並列して存在しているようである。詳細な時期は不明であるが、7世紀が中心と考えられている。

西脇市には高松7号墳と坂本1号墳の2基が存在する。高松7号墳は3棺が直列し、棺内は調査されていないが7世紀後半～8世紀初頭の時期が与えられている。坂本1号墳の小型石棺は袖部に位置し、7世紀末の時期が与えられている。加東郡社町の三草85号墳や吉馬東方にも存在しているようである。



第5図 小型石棺を戴する横穴式石室



第6図 横穴式石室内に小型石棺を蔵する古墳分布図

番号	地名	古墳名	古墳形	直径	周長	内径	天井	石室	石棺	内室	天井		
1	淡路市平岡町	淡路古墳	方墳	4.8	15.7	10.2	高さ2.5m	古墳跡	平場	無	0.73	0.46	
2	西脇	西脇古墳	A34号墳	無	0.87	0.49	0	25	1号室	無	0.81	0.44	
3			A35号墳	無	0.5	0.42	0	20	1号室	無	0.7	0.7	
4			B3号墳	無	0.55	0.33	0	25	1号室	無	0.6	0.6	
5			B25号墳	無	1.3	0.56	0.5	30	1号室	無	0.5	0.5	
6	福崎町勝原区	第1天守	方墳	1.06	3.45	2.16	7	31	秦古墳	加古川市平岡町	2号室	無	
7		海城7	1号室			0	8				1号室	0.66	0.42
			又文館								2号室	0.77	0.42
8	天守	福崎町勝原	天守	1	3.45	2.16	0.5	25	1号室	無	0.6	0.3	
9	天守	福崎町勝原	天守	0.51	1.64	0.91	0.5	20	1号室	無	0.75	0.5	
10			天守			0	0	25	1号室	無	0.6	0.4	
11	天守	福崎町勝原	天守	0.51	1.64	0.91	0.5	20	1号室	無	0.5	0.2	
12	天守	福崎町勝原	天守	0.51	1.64	0.91	0.5	20	1号室	無	0.5	0.2	
13	天守	福崎町勝原	天守	0.51	1.64	0.91	0.5	20	1号室	無	0.5	0.2	
14	天守	福崎町勝原	天守	0.51	1.64	0.91	0.5	20	1号室	無	0.5	0.2	
15	天守	多可郡不二町	1号室	無	1.05	3.45	0.5	17	1号室	中室	1号室	内室	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	2号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	3号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	4号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	5号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	6号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	7号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	8号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	9号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	10号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	11号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	12号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	13号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	14号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	15号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	16号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	17号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	18号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	19号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	20号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	21号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	22号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	23号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	24号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	25号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	26号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	27号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	28号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	29号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	30号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	31号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	32号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	33号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	34号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	35号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	36号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	37号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	38号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	39号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	40号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	41号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	42号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	43号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	44号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	45号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	46号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	47号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	48号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	49号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	50号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	51号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	52号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	53号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	54号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	55号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	56号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	57号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	58号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	59号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	60号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	61号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	62号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	63号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	64号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	65号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	66号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	67号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	68号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	69号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	70号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	71号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	72号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	73号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	74号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	75号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	76号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	77号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	78号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	79号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	80号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	81号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	82号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	83号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	84号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	85号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	86号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	87号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	88号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	89号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	90号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	91号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	92号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	93号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	94号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	95号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	96号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	97号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	98号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	99号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	100号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	101号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	102号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	103号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	104号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	105号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	106号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	107号室	無	0.64	0.46	
			人室	人室	0.5	1.64	0.5	25	108号室	無	0.64	0.46	

加西市には前記のヤクチ4号墳のほかに状覚山古墳群があり、7基に小型石棺が認められる。10号墳の石棺内からは金環1と管玉2、刀子が出土している。いずれの古墳も7世紀後半と考えられている。

加古川市域には奥新田2号墳のほかに、大龜谷山古墳、中山3号墳、カメ焼谷2号墳に小型石棺が認められ、1.5mを越えるが、神子谷1号墳も存在している。中山3号墳の棺内からは鉄刀と銅環が出土し、詳細な時期は不明であるが、その他の古墳は7世紀後半～末に比定できる。カメ焼谷2号墳は3棺が直列し、最奥棺からは勾玉・切子玉・刀子が出土し、最も入り口に近い棺には灰と焼土が認められた。

小野市域には中番4・22・23号墳に石室内小型石棺が存在し、小型石棺のみ検出された17号墳では、長さ65cmの石棺内に成人男性の頭骸骨と四肢骨が集納されていた。勝手野6号墳は装飾付須恵器が出土した古墳として有名であるが、石室内に石棺が存在していた。石棺は割れており、長さは不明であるが、幅が30cmと狭いことから、長さも1.5m未満と推定される。TK217型式である。

以上、兵庫県内の小型石棺を有する横穴式石室墳は、西播磨では姫路市や太子町といった南部に限られ、時期が判明しているものでは、東播磨に比べて古いものが目立つ。一方、東播磨ではかなり北まで存在しており、加古川中・下流域のなかでも右岸水系に集中している。特に集中が著しいのは小野～西脇市域を除いた中町・加西市・加古川市域で、加古川水系全体数の8割以上を占めている。ただし、西脇市域や加東郡社町、小野市中番といった加古川本流左岸にも少数存在している。

一方、兵庫県外に目を移してみると、奈良県にも数例存在していることが判明した。奈良県北葛城郡新庄町寺口千塚古墳群と御所市元町石光山古墳群である。寺口千塚古墳群では、調査された古墳中の10号墳と14号墳の2基の横穴式石室内に小型石棺が存在し、10号墳では石棺内より大腿骨と歯が接して出土しており、改葬墓と考えるべき指摘がされている。人骨は子供ではないことが判明し、石棺内からは耳環と刀子が各1点出土している。石棺の下から多量の釘が出土していることから、木棺埋葬の後に石棺が安置されたと考えられている。その時期はTK209型式である。14号墳の石室内には2棺が存在し、奥の第1棺からは刀子と若年成人と推定される人骨が出土している。時期はTK43～TK209型式で、兵庫東播の例よりも古く位置づけられる。19号墳は石棺の長さ1.8mと長く、未調査で時期も不明だが、参考例として挙げておく。石光山古墳群中の19号墳は石室奥壁に接して2棺並列し、6世紀末～7世紀初頭の時期が与えられている。22号墳では小型の石室内に1棺存在するが、石室は非常に小規模で、正確な時期は不明である。49号墳も石棺を内蔵するが、長さ1.67mと大きい。参考に掲げておく。

奈良県以外で管見に触れたのは、三重県一志町下名倉4号墳である。両袖の石室内に長さ1.15mの小型石棺を内蔵する。時期は7世紀前半である。やや規模の大きな石棺を蔵する古墳も近隣に存在する。

なお、横穴式石室内に収められた小型陶棺では、岡山県備前市惣田奥4号墳などが認められる。

以上、横穴式石室内に小型石棺を内蔵する古墳を瞥見してきたが、奥新田東2号墳ほど数多い主体部が認められた例はなさそうである。

石棺内の副葬遺物をみると、耳環の出土が目立つ。しかし、その数は1点が殆どで、副葬する品物として形骸化している可能性が高い。また、刀子も認められ、副葬品のセットであったのかも知れない。

石棺内の人骨が良好に遺存していたものについては、その大半が子供ではないことや、骨の配置から集骨改葬された状況を示すものとなっていることに注意が必要である。また、石棺が設置される前には木棺が存在していたことを示す例が多く、石棺が置かれていないスペースが存在するものも多い。つまり、改葬される前に同じ石室内で木棺等に遺体を葬り、一定時間の後石棺に集骨したものと推定される。

これらの石室内小型石棺が存在するのは、大和や西播磨では6世紀末～7世紀前半、東播磨では、既

に指摘されているように、7世紀の後半にそのピークが認められることが判明した。大和ではその分布が大和盆地南東部に限られ、小型石室もまた、葛城山東麓地域に集中していることが指摘されている。横穴式石室内に小型石棺を安置する情況が、播磨と大和盆地南東部に集中することは、その共通するところに家形石棺製作の中心地である点を挙げることができる。つまり、播磨の竜山石と大和の二上山の採石に係わる集団との共通点がある。また、播磨北部の中町地域には、7世紀末にあって、長さ2mを越える組み合わせ式家形石棺を藏する村東山古墳³⁹があり、石棺製作集団との深い結びつきを想像させる。一方、小型石棺にとらわれず視点を変えれば、石棺や小型石室等が多く存在する地域では、その周辺に石材が豊富に存在することが挙げられ、単に地質的な理由による分布の偏りということも否めない。

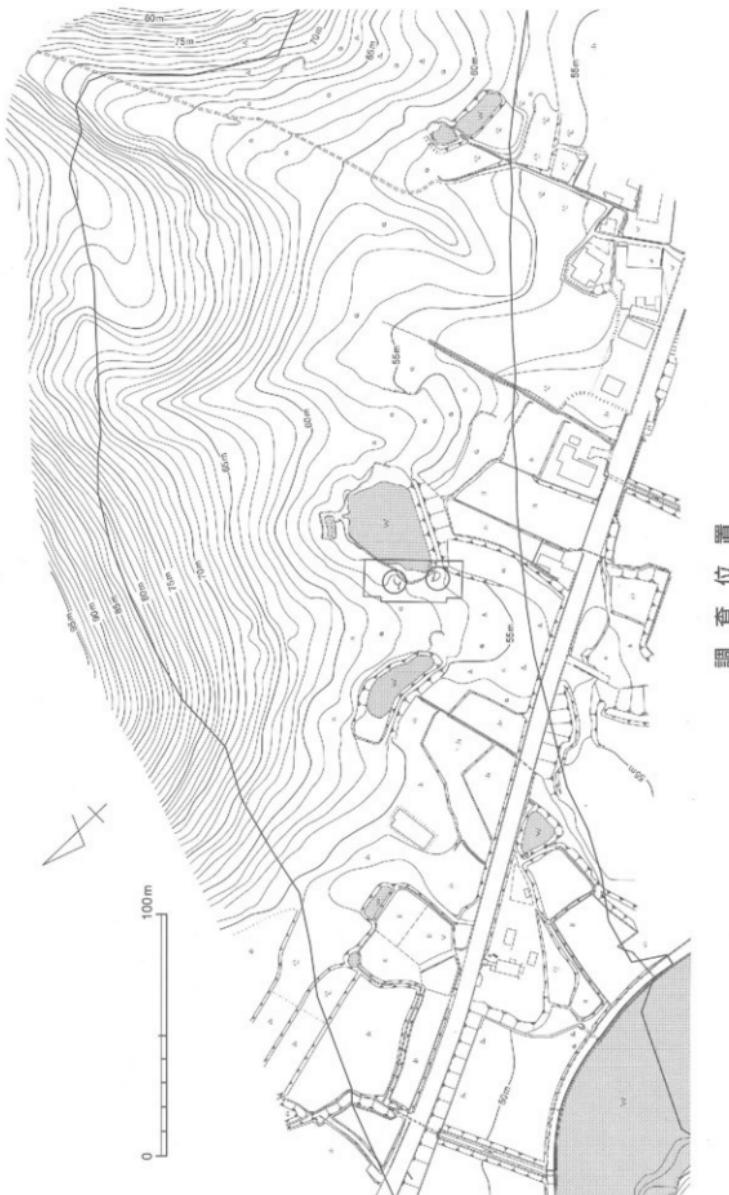
いずれにしても、石室内小型石棺が示すものが改葬とするならば、7世紀頃から改葬が多く認められるようになるという観点で終末期群集墳を捉え直す必要があり、葬制における大きな画期となる。終末期群集墳に埋葬される集団にとっては大きな変動の時期であったと想像される。なお、小型石棺内に炭・灰混じり土が堆積しているのは、火葬骨を入れた可能性も考慮すべきと思われる。奥新田東2号墳のように周溝内に多量の炭の集積が存在するものや、炭・灰が入った焼土壙が周辺に存在し、石棺内で炭・灰混じり土が検出されるのは火葬に関連したものとして、木棺墓に葬ったのち改葬するものとは別に扱う必要性を感じるのである。

今後は、家形も含めた小型石棺直葬のものや、伸展葬ができないような小型石室についても、人骨の遺存状態や炭・灰の残存状況とからめて、さらに追求してゆく必要があると思われる。

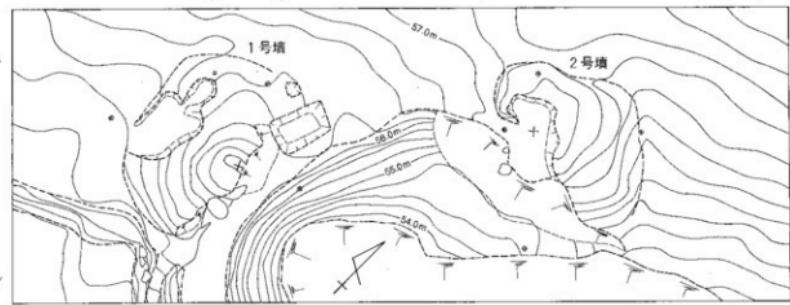
文献

- (1) 森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」『古代学研究』第57号 1970年 など
- (2) 反己和弘「豪華型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』第100号 1983年
木下保明「7世紀型古墳群について」『考古学論叢』第1集 1985年
- 松本百合子「横穴式石室の歴史(群集墳)」『奈良考古学』第45号 横穴式石室の世界 雄山閣 1993年
- (3) 加西市教育委員会「ヤクチ古墳群」 加西市埋蔵文化財調査報告2 1985年
- (4) 間壁忠雄「石塚の小石棺をめぐって」「今里幾先生古稀記念 摂磨考古学論叢」 1990年
- (5) 小町教育委員会・京都府立大学考古学研究室「丹波山古墳群Ⅰ」 1999年
- (6) 兵庫県教育委員会「西脇古墳群」 兵庫県文化財調査報告 第114号 1995年
- (7) 東洋大学附属姫路高等学校「姫路丁古墳群」 1966年
- (8) 文獻(7)および文献(9)
- (9) 「姫路市史」第2巻 考古学から見た姫路 1970年
- (10) 三村修二・小山佳代「原・北町古墳」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度」 兵庫県教育委員会 1985年
- (11) 中町教育委員会「安楽田・女夫岩遺跡」 中町文化財報告4 1993年
- (12) 兵庫県教育委員会「石垣山古墳群・石垣山遺跡」 兵庫県文化財調査報告 第129号 1993年
- (13) 文獻(5)および、中町教育委員会「天大石室塚を掘る」 中町文化財報告21 2000年
- (14) 兵庫県教育委員会「兵庫県埋蔵地図」 2000年
- (15) 神峰「加古川流域の古代史(上・中流篇)」 妙見山麓遺跡調査会 1989年
- (16) 「西脇市史」本編 1983年
- (17) 「伏見山古墳群」「平成7年度 年報」 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996年
「伏見山古墳群」「平成8年度 年報」 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997年
- (18) 兵庫県教育委員会「大丸谷山古墳」 兵庫県文化財調査報告 第212号 2001年
- (19) 「加古川市史」第4巻 史料編「自然 古考 古代 中世」 1996年
- (20) 小野市教育委員会「小野市中香地区群集墳全般報告」 小野市文化財調査報告書 第1集 1969年
- (21) 「勝手野古墳群跡」「平成7年度 年報」 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996年
「小野市史」第4巻(史料編I) 1998年
- (22) 奈良県立橿原考古学研究所「寺口千塚古墳群」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第62号 1991年
- (23) 奈良県立橿原考古学研究所「奈城・石光山古墳群」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31号 1976年
- (24) 一志町教育委員会「下名倉古墳群発掘調査報告」 1971年
- (25) 竹内英則「三重県の横穴式石室研究」「研究紀要」第4号 三重県埋蔵文化財センター 1995年
- (26) 間壁忠厚・開壁既成「淡井田4号墳」「倉敷考古館研究集報」 第17号 倉敷考古館 1982年
- (27) 楠元哲夫「鳥石東古墳」「奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ」 奈良県立橿原考古学研究所 1976年
- (28) 中町教育委員会「竹東山古墳・板木・谷遺跡」 中町文化財報告1 1992年
- (29) 河上邦彦「終末期古墳における改葬墓に関する問題」「後・終末期古墳の研究」 雄山閣出版 1995年
- (30) 森本 徹「火葬墓と火葬遺構」「大阪文化財研究」第2号 (財) 大阪文化財センター 1991年

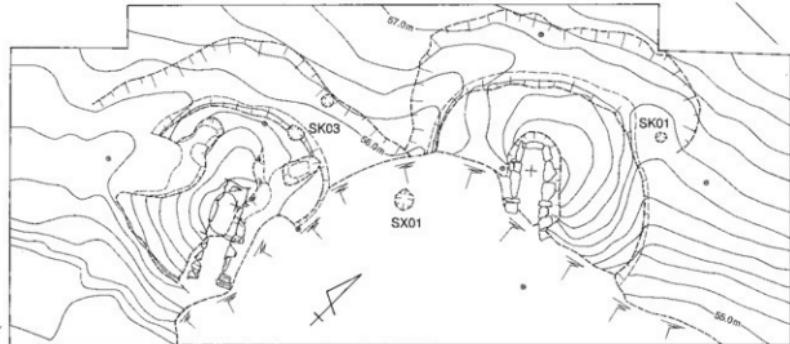
図 版



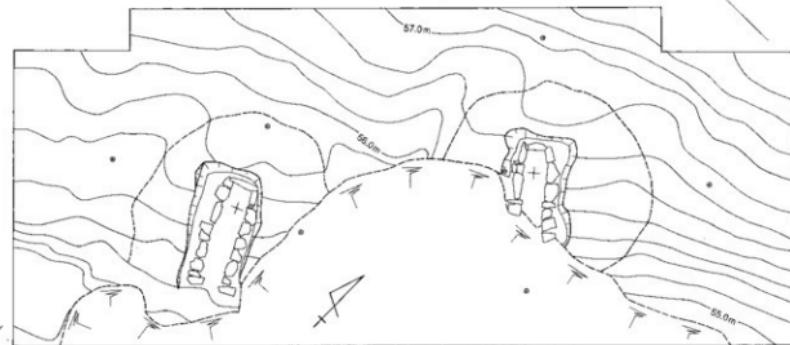
図版2



調査前



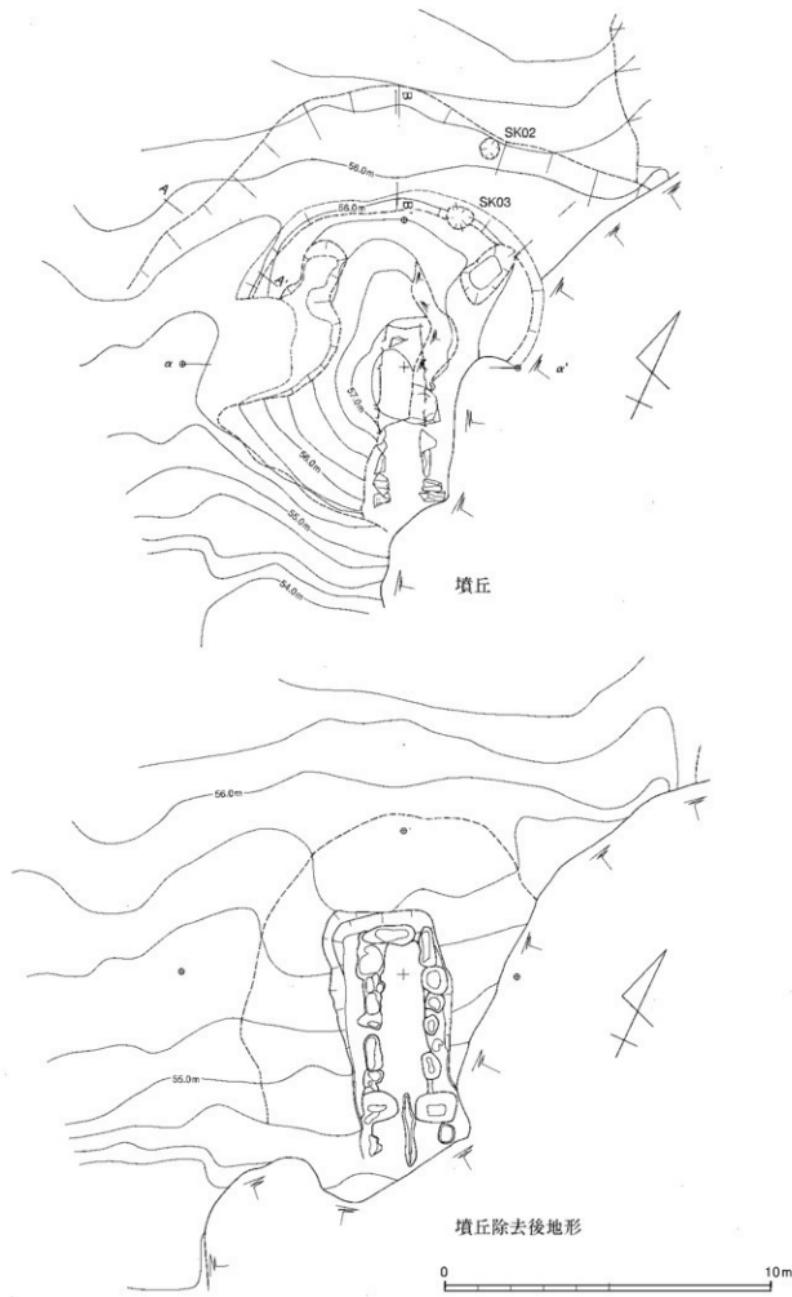
墳丘



墳丘除去後

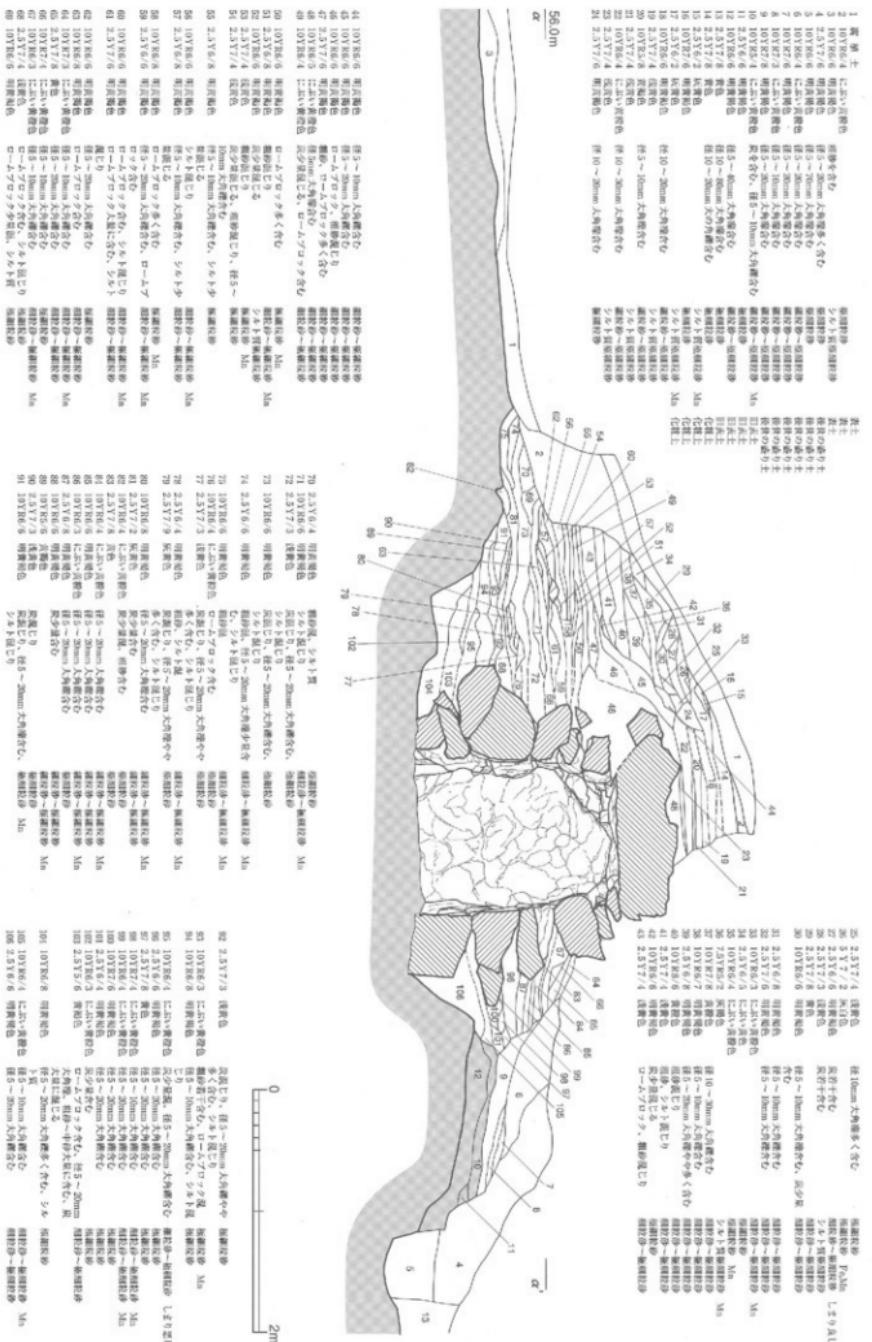
地形測量図

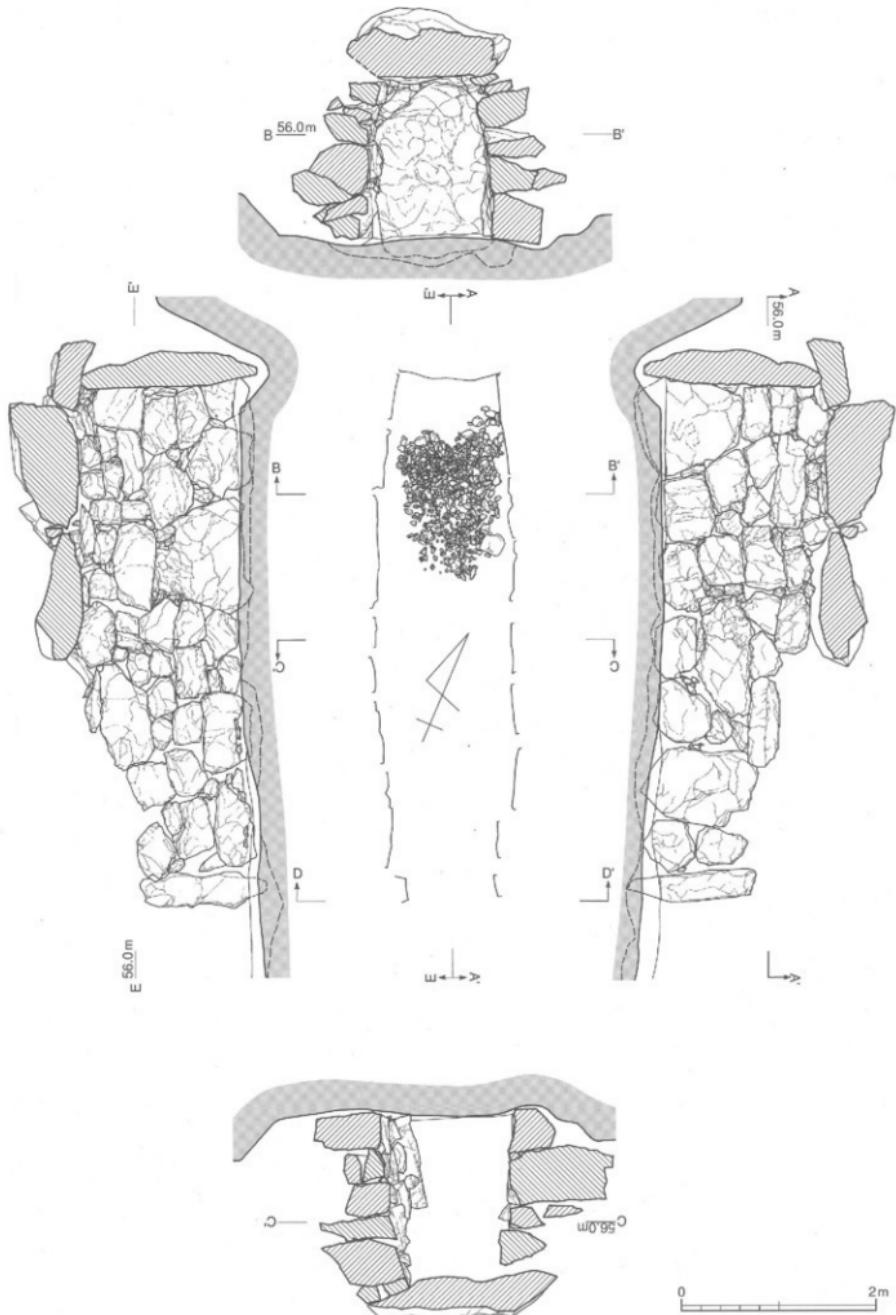




1号墳地形測量図

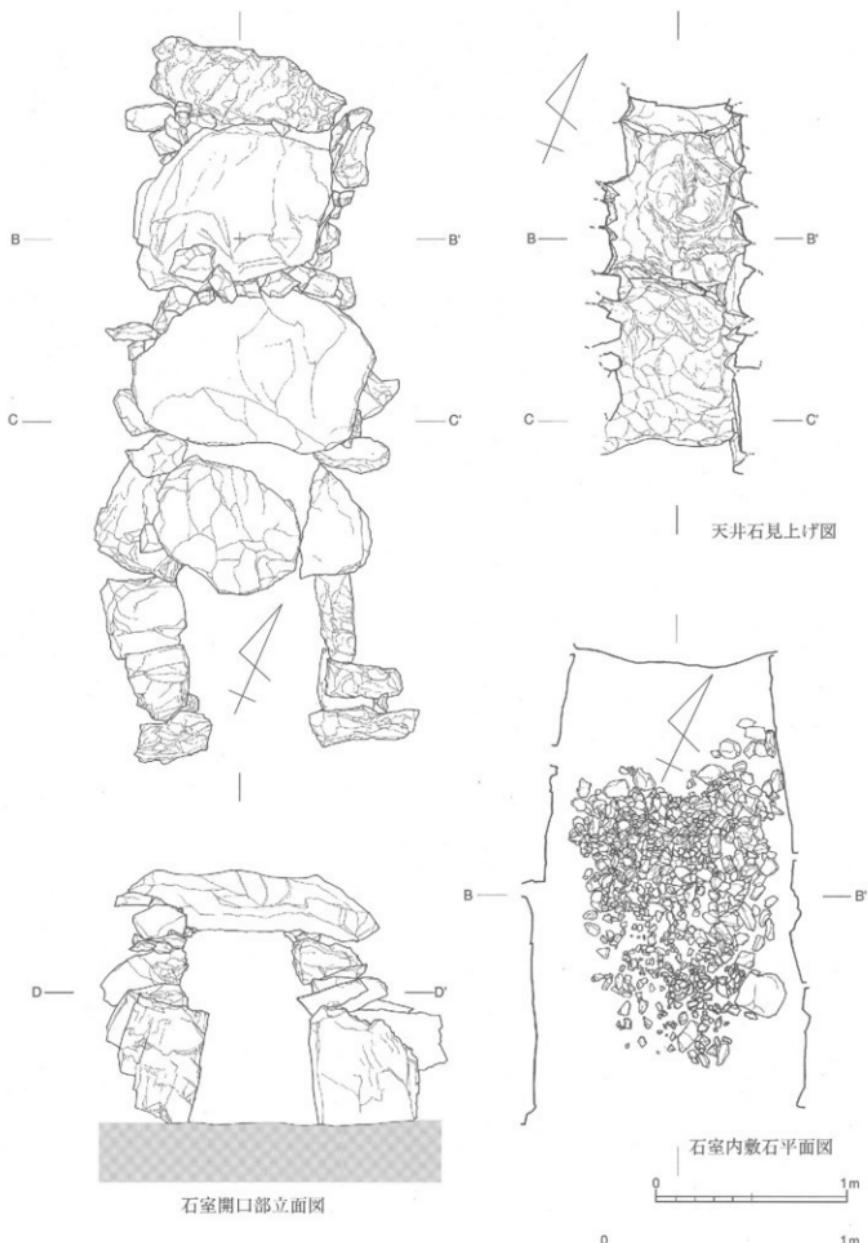
図版 4



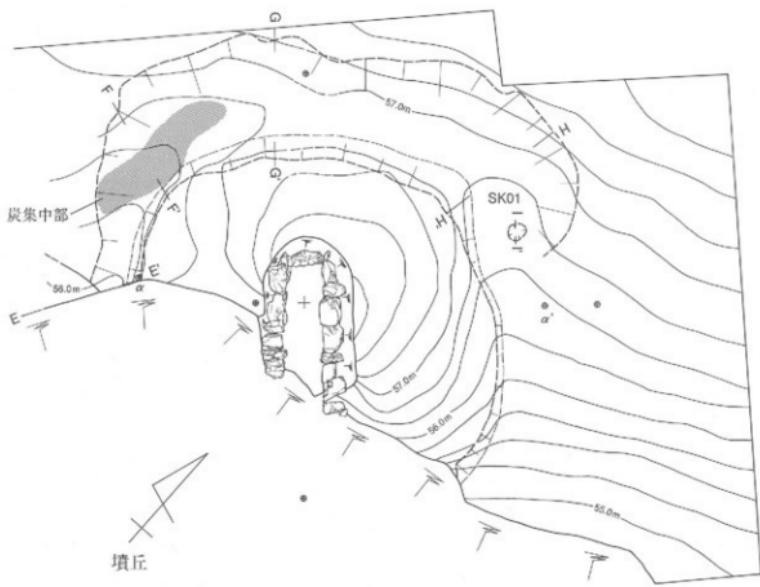


1号墳石室実測図 (1)

図版6

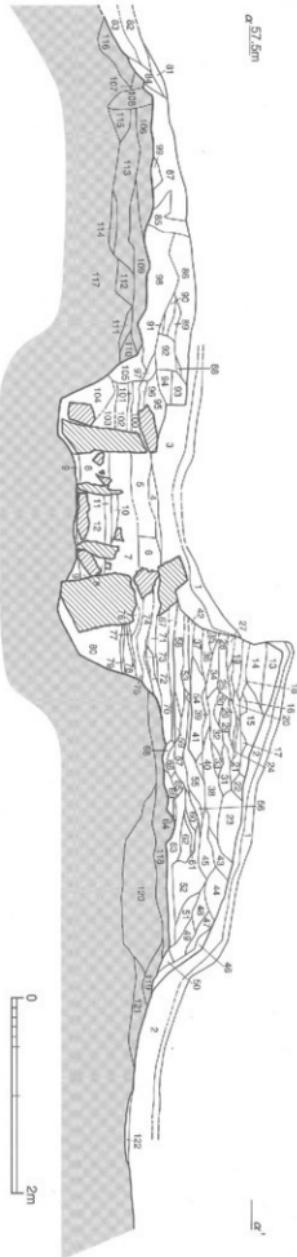


1号墳石室実測図（2）

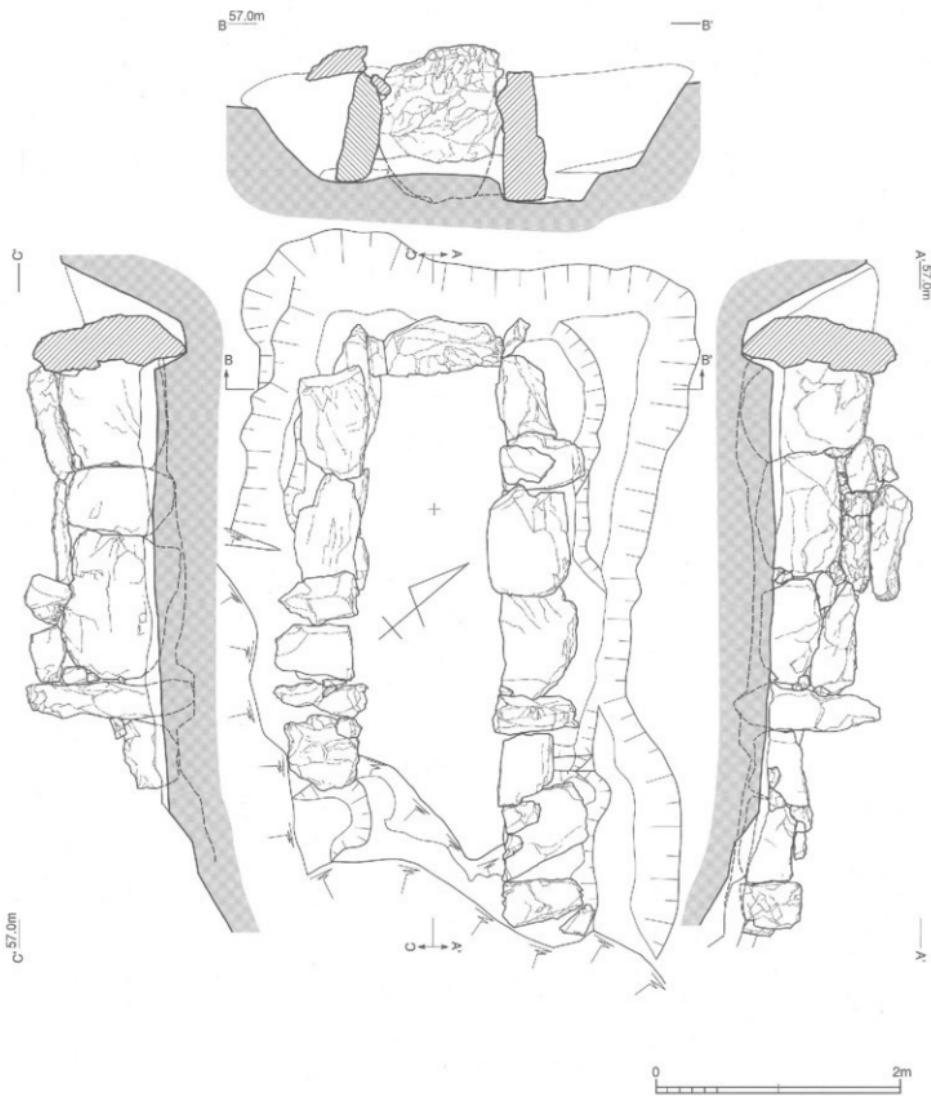


2号墳地形測量図

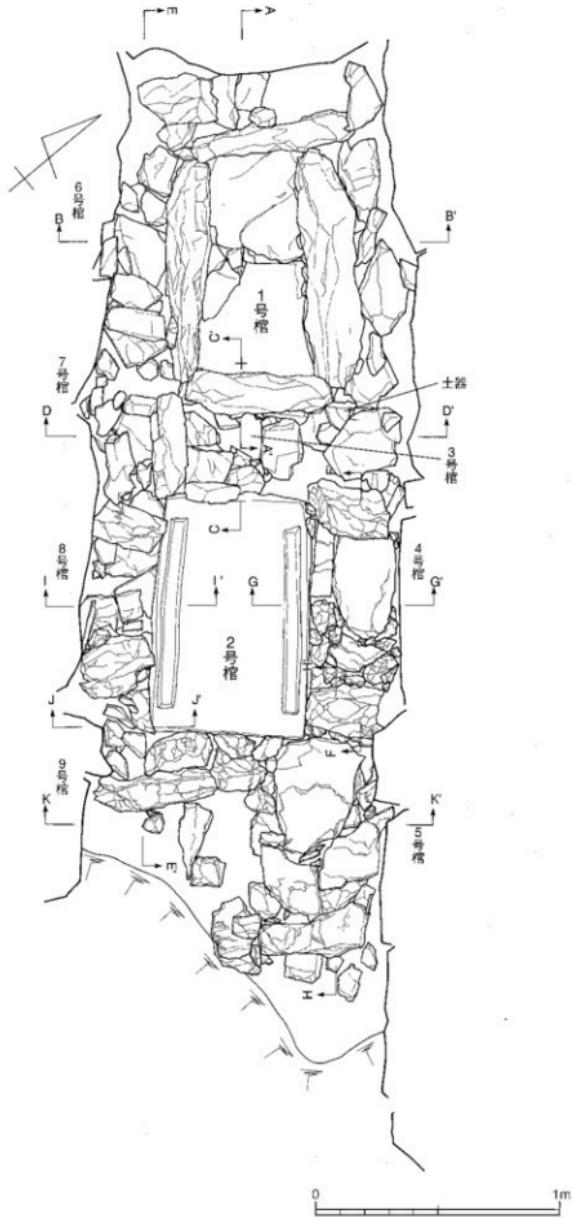
0 10m



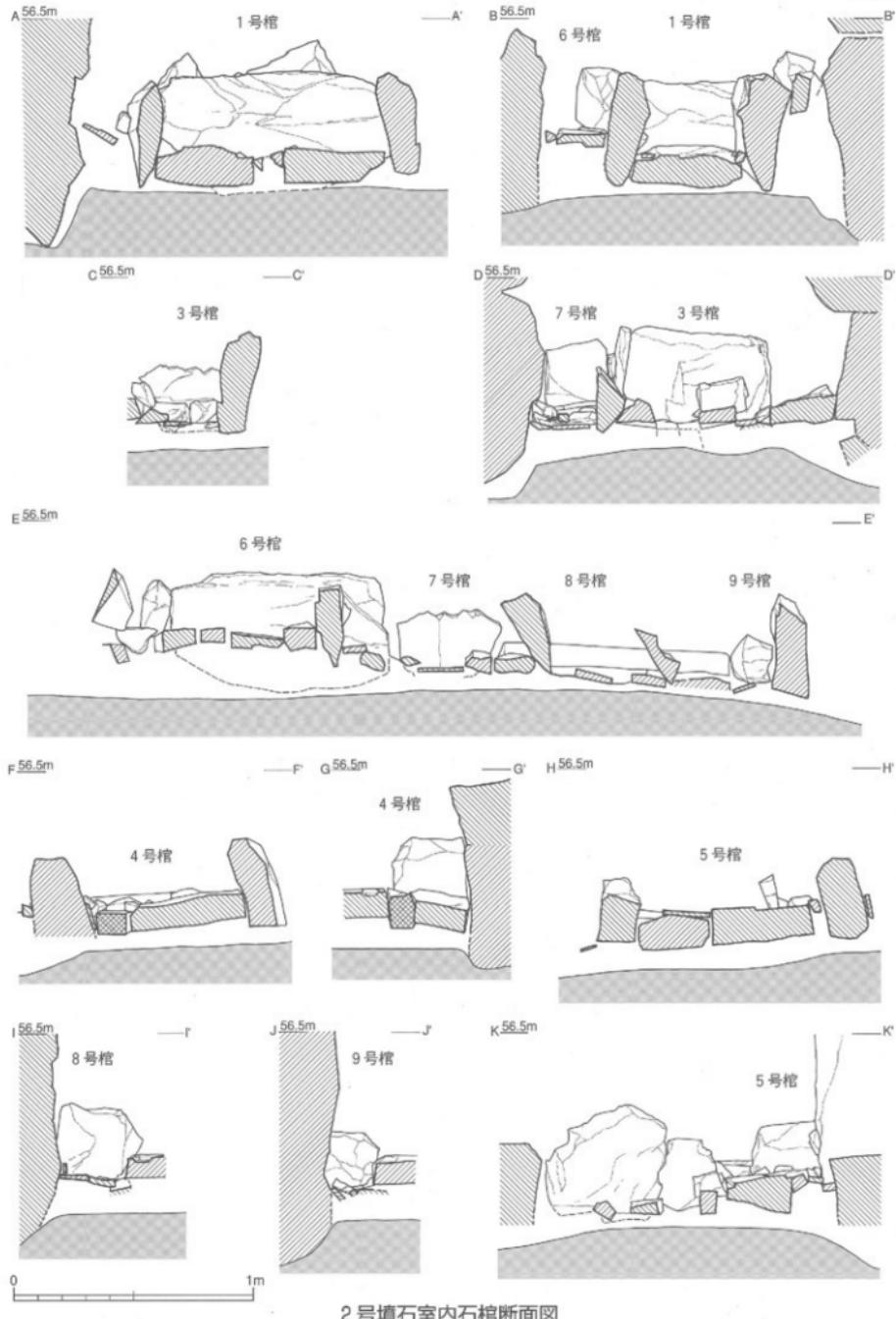
2号墳 墳丘上層断面図

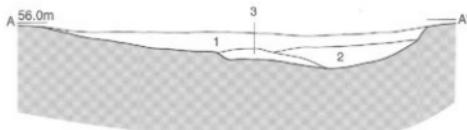


2号墳石室実測図



2号墳石室内石棺配置図





- 1 10YR6/6 明黄褐色 径2mm 大粒～細砂混 シルト質中砂～細砂
2 2.5Y6/6 明黄褐色 径1mm 大粒含む、粗砂混 シルト質シート
3 2.5Y7/4 淡黄色 細砂多く含む 大粒混、粗砂多く含む シルト質シート

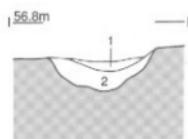


- 1 10YR5/8 黄褐色、細少紫斑 シルト混じり細砂
2 10YR6/6 明黄褐色、暗、淡少紫斑 シルト質シート
3 2.5Y7/4 淡黄色、粗砂～中砂混

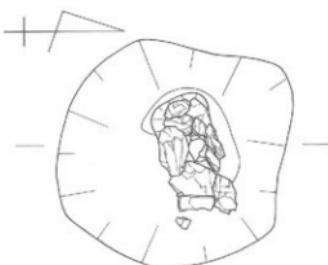


- 1 10YR5/8 黄褐色、細少紫斑 シルト混じり細砂
2 10YR6/6 明黄褐色、暗、淡少紫斑 シルト質シート
3 2.5Y7/4 淡黄色、粗砂～中砂混

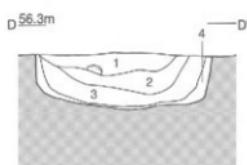
1号墳周溝埋土土層断面図



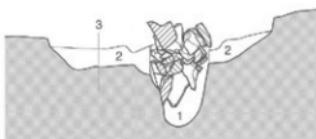
- 1 10YR3/1 黒褐色、粗砂混 (炭多く含む、灰層)
2 2.5Y5/3 黄褐色、径3mm大粒含む、粗砂混



SK01 土層断面図



- 1 10YR6/6 明黄褐色、径1mm大粒少粒含む シルト質細砂
2 黄褐色、粗砂混
3 10Y4/3 に近い黄褐色 シルト質細砂 (しまり悪い)
4 10YR8/4 淡黄褐色 シルト混じり 中砂～粗砂

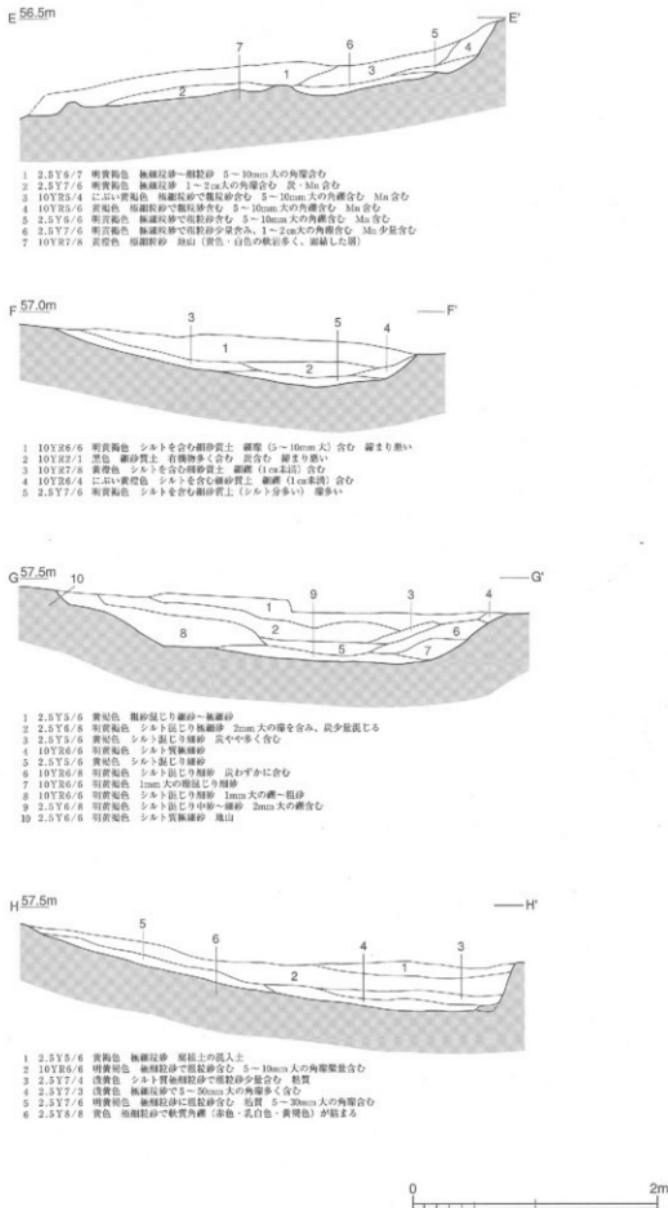


SX01 実測図

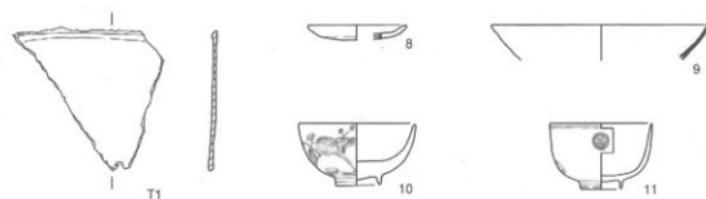
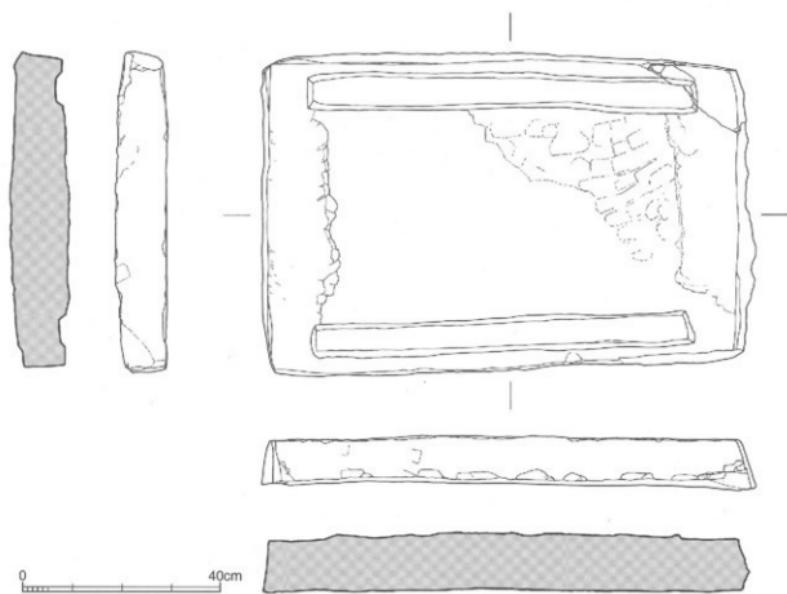
SK03 土層断面図



1号墳周溝埋土土層断面図



2号填周溝埋土土層断面図



0 5cm

0 20cm

出土遺物実測図

写 真 図 版



1・2号墳調査前全景（南東から）



1・2号墳調査前全景（北から）

写真図版2



1・2号墳調査前全景（南東から）



1・2号墳調査後全景（南東から）



1号墳調査前全景（南東から）



1号墳調査前全景（南から）

写真図版 4



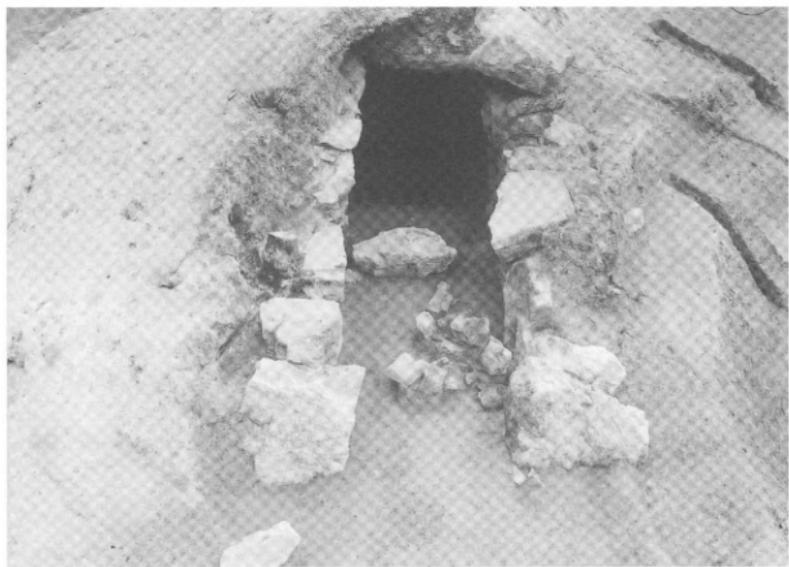
1号墳石室石材崩落状況（南上から）



1号墳石室石材崩落状況（南から）



1号墳石室石材崩落状況（北上から）

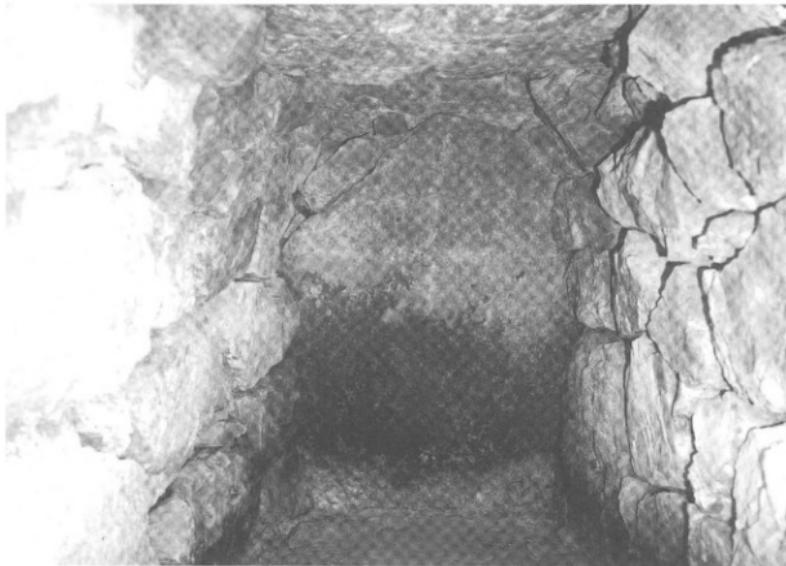


1号墳下面石材崩落状況（南から）

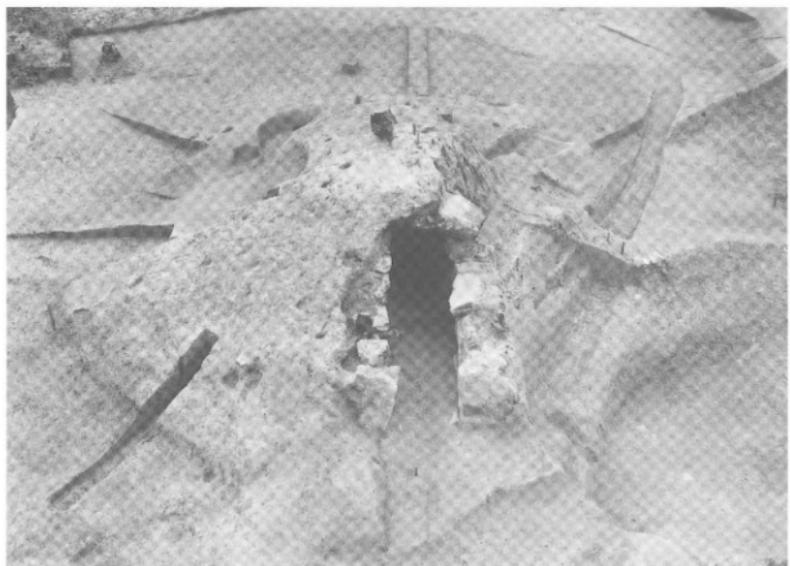
写真図版 6



1号墳石室前部（南から）



1号墳石室内（南から）

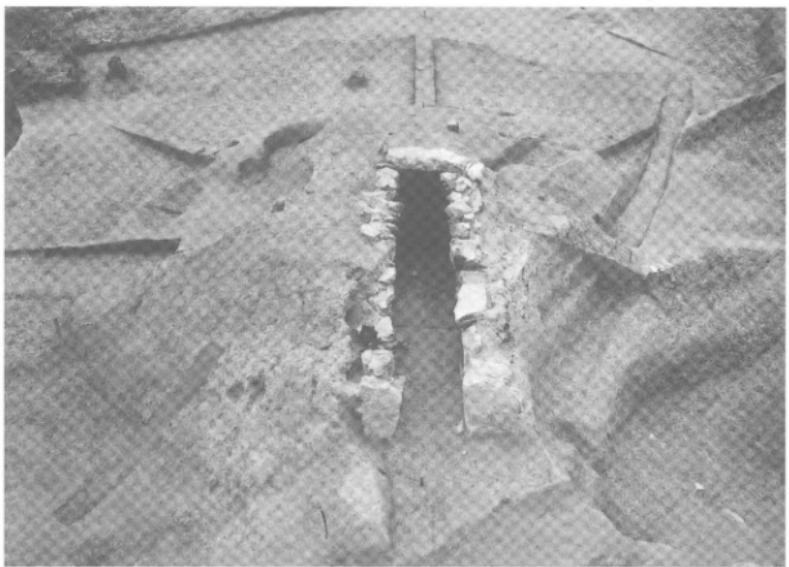


1号墳全景（南上から）



1号墳墳頂盛土除去後全景（南上から）

写真図版8



1号墳天井石除去後全景（南上から）



1号墳天井石除去後全景（南上から）



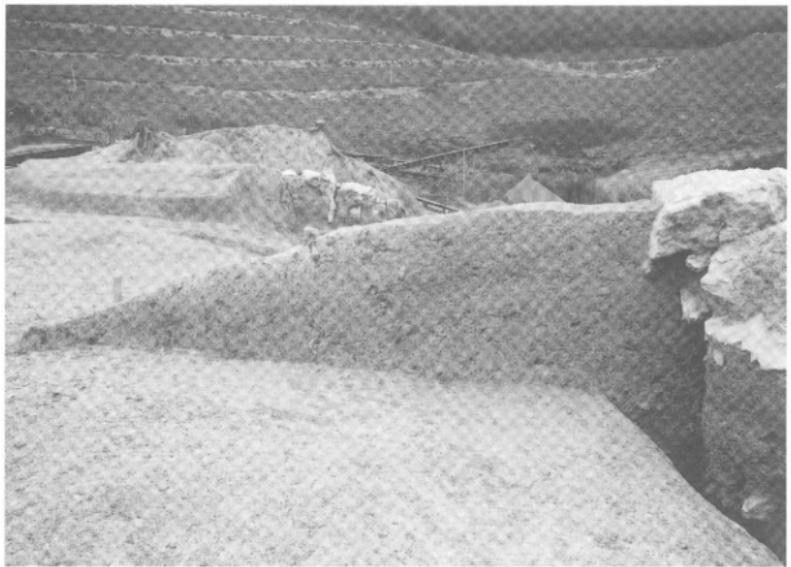
1号墳石室西側壁（南東から）



1号墳石室東側壁（南から）



1号墳石室内敷石（南から）



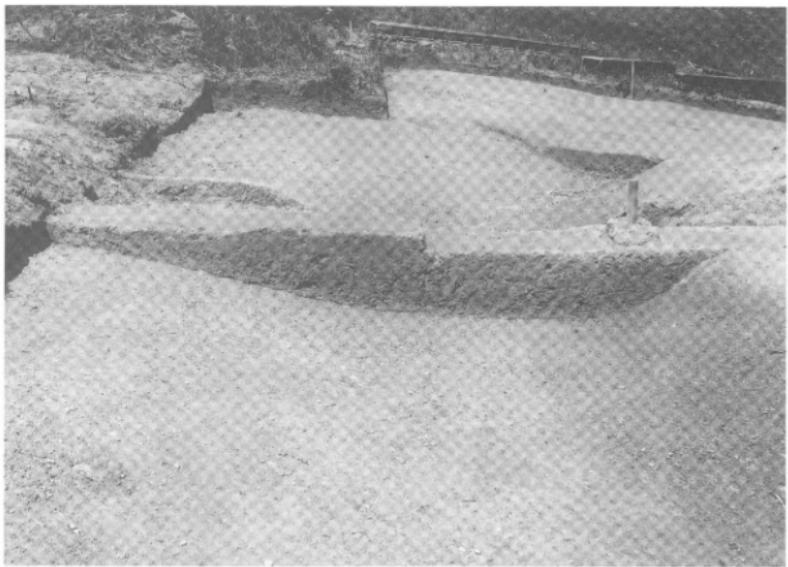
1号墳奥壁裏側墳丘土層断面（西から）



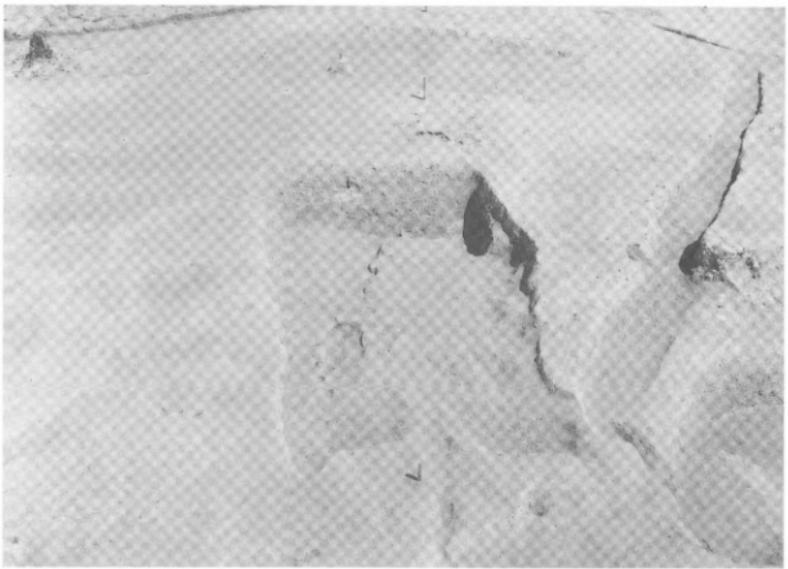
1号墳西壁裏側填丘土層断面（南から）



1号墳東壁裏側填丘土層断面（南から）



2号墳周溝内埋土土層断面（南西から）



1号墳石室墓壙（南から）



2号墳調査前全景（南から）



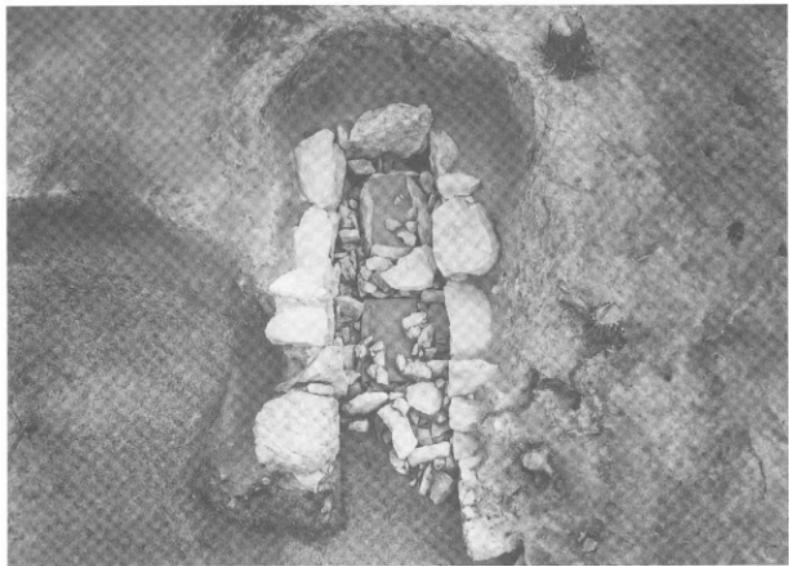
2号墳石室検出状況（南東から）



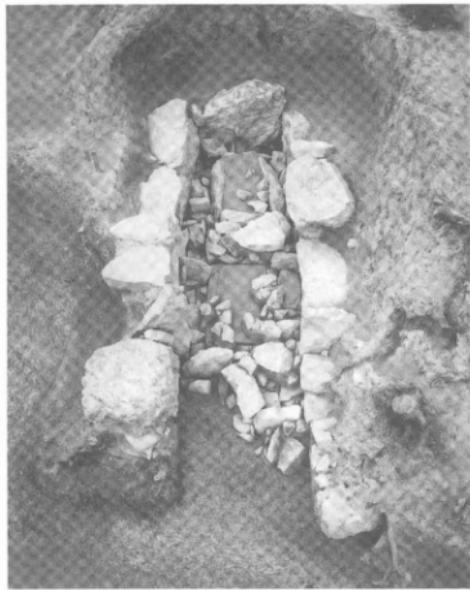
2号墳石室石材崩落状況（南東から）



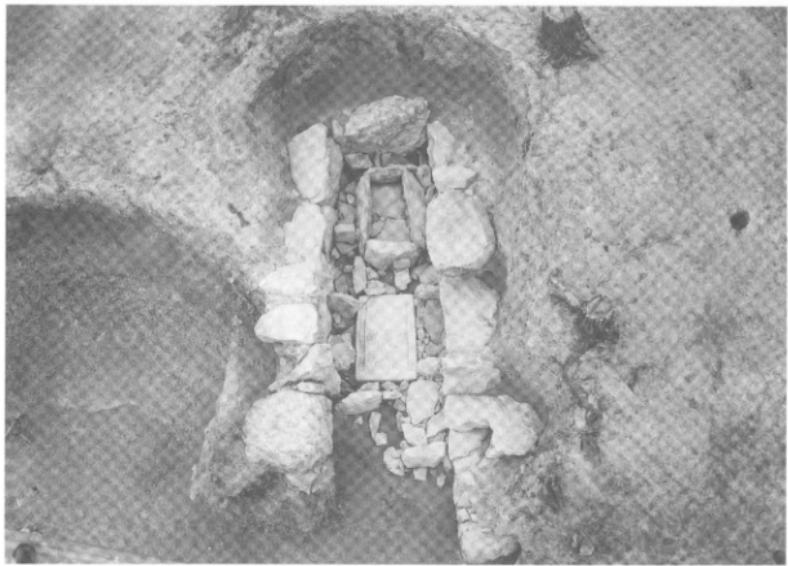
2号墳石室石材崩落状況（南東から）



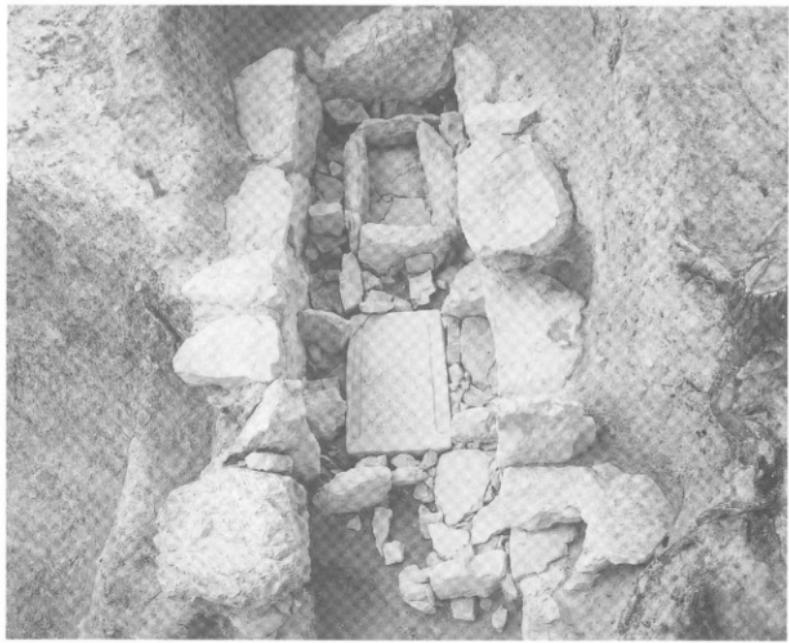
2号墳石室石棺検出状況（南東から）



2号墳石室石棺検出状況（南東から）



2号墳石室・石棺全景（南東から）



2号墳石室内石棺全景（南東から）



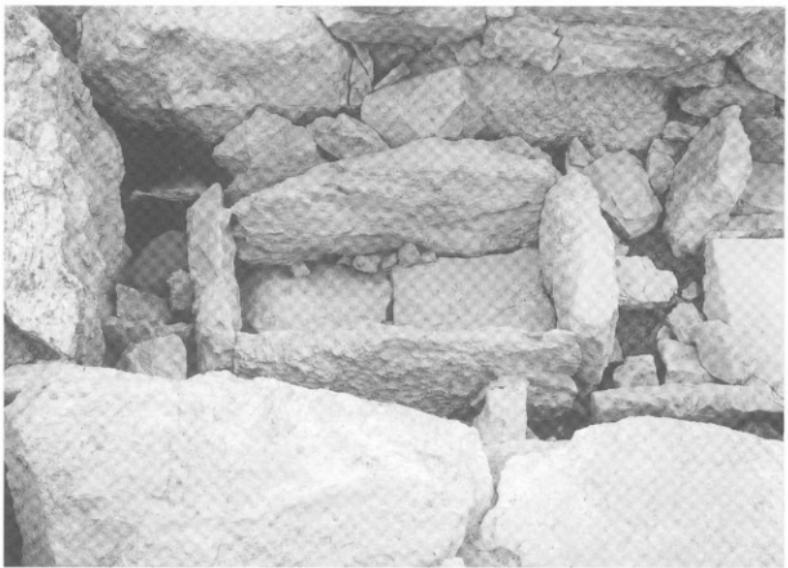
2号墳石室内1号棺周辺（北東から）



2号墳石室内1号棺周辺（北西から）



2号墳 1号棺検出状況（南西から）



2号墳 1号棺完掘状況（南西から）



2号填石室内 2号棺周辺（北東から）



2号填 3号棺出土状況（南東から）



2号墳東壁裏側填丘土層断面（南東から）



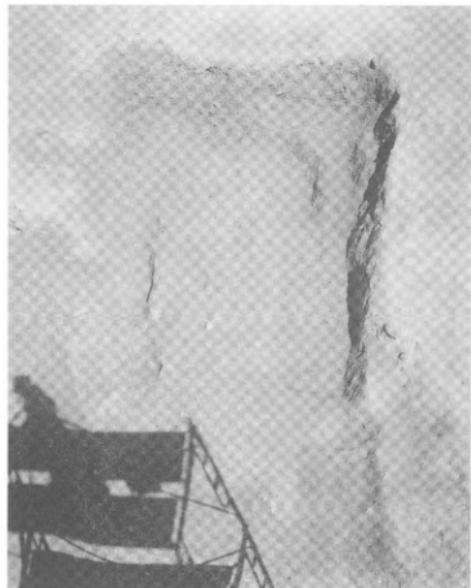
2号墳奥壁裏側填丘土層断面（南西から）



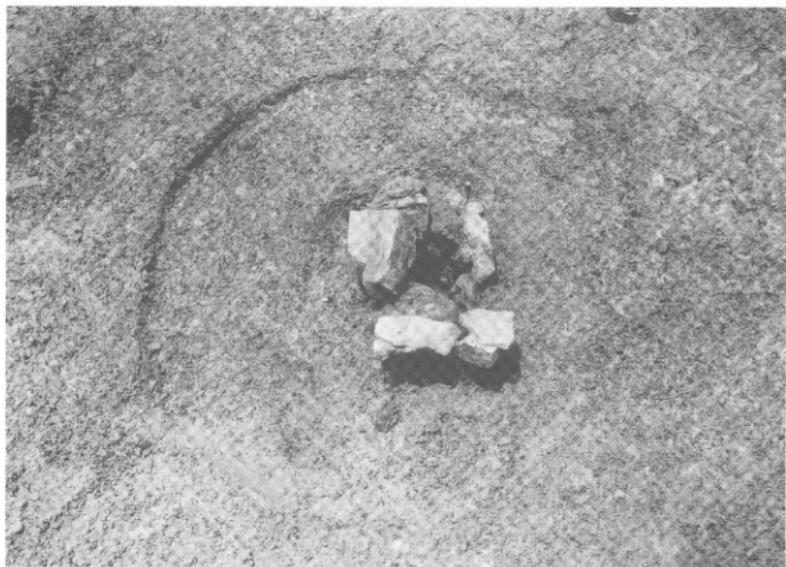
2号填全景（南東から）



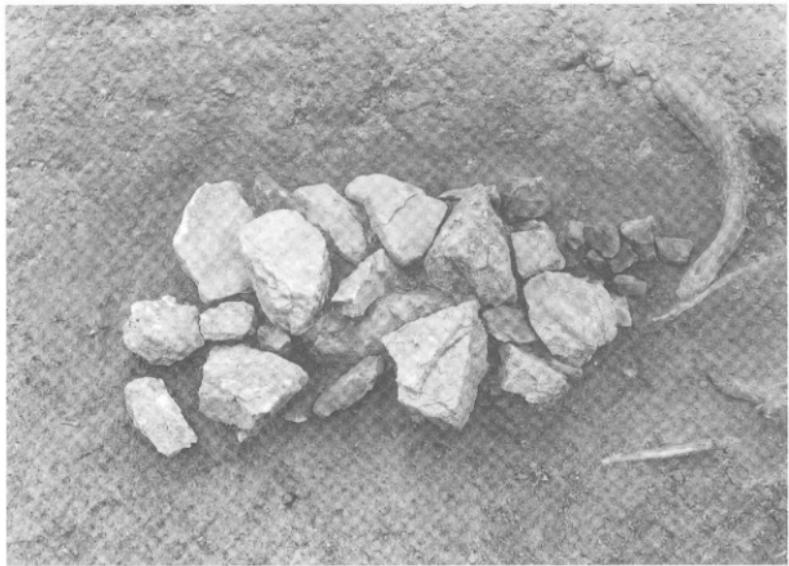
2号填基底部全景（南東から）



2号墳石室墓壙（南東から）



SX01（東から）



2号填墳丘北東裾部集石（北東から）



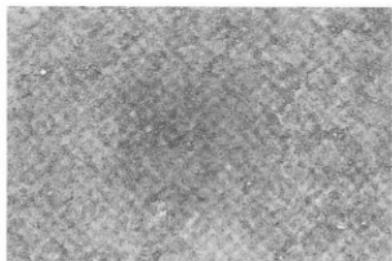
調査参加者



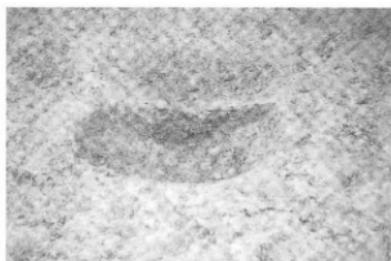
1号埴表道部須恵器出土状況（南東から）



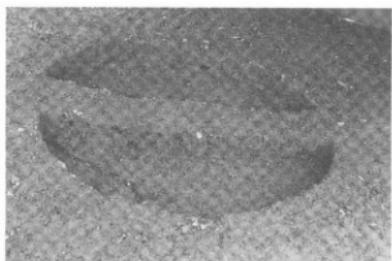
2号填 1号棺埋土土層断面（北東から）



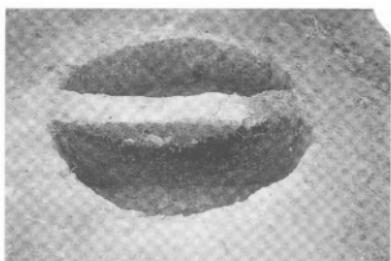
SK01検出状況（南東から）



SK01土層断面（東から）



SK02土層断面（西から）



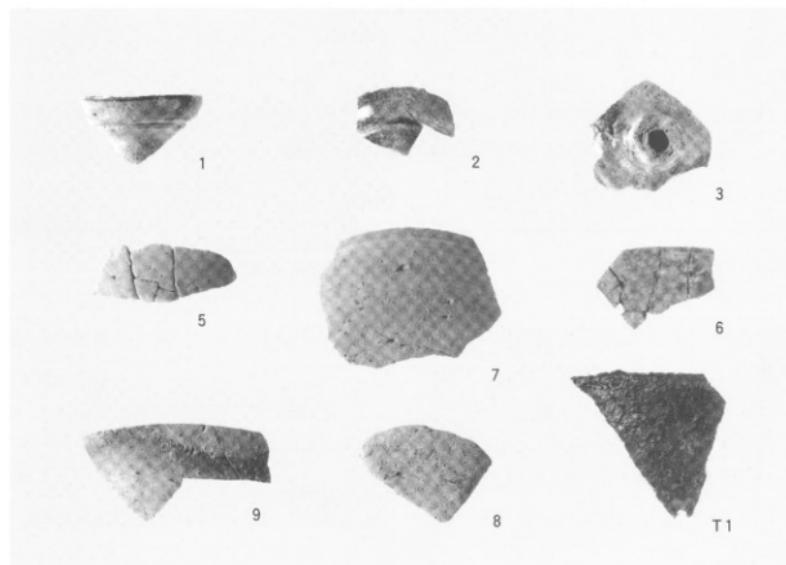
SK03土層断面（東から）



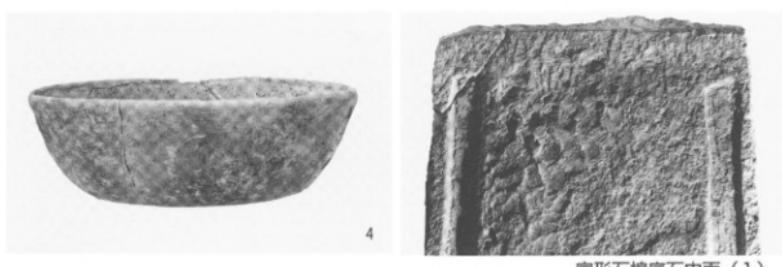
SX01断面（南東から）



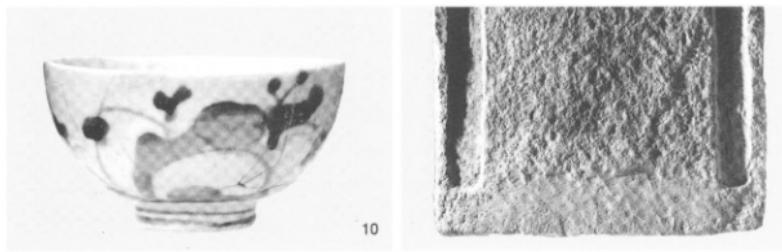
土器類集積部（南から）



出土遺物

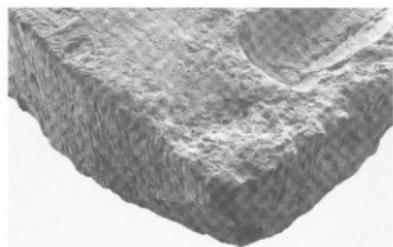


家形石棺底石内面（1）



家形石棺底石内面（2）

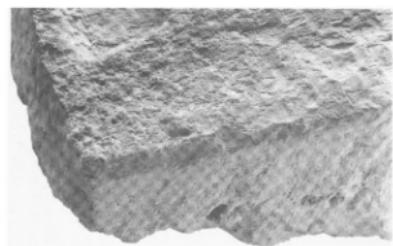
出土遺物



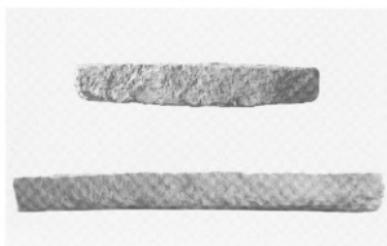
家形石棺底石細部



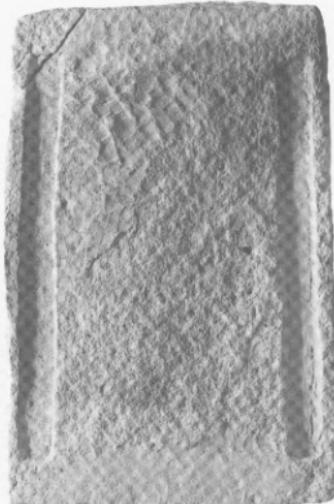
家形石棺底石細部



家形石棺底石細部



家形石棺底石側面



家形石棺底石内面



家形石棺底石外面

報告書抄録

ふりがな	おくしんでんひがしこふんぐん							
書名	奥新田東古墳群							
副書名	山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告							
卷次	XXXV							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第222冊							
編著者名	岸本一宏・高木芳史							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-0011 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078-341-7711							
発行年月日	2001(平成13)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
おくしんでんひがし 奥新田東 古墳群	ひょうごけん 兵庫県 かこがわし 加古川市 へいそうちょう 平荘町 なかやま 中山863-3	28210	950059	34度 50分 00秒	134度 52分 58秒	1995.4.26 ~ 1995.8.4	654m ²	山陽自 動車道 建設事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
奥新田東 古墳群	古墳	古墳後期 (終末)	古墳(横穴式 石室墳)2基	須恵器・土師 器	家形石棺底石出土			

兵庫県文化財調査報告 第222番

奥新田東古墳群

—山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXV—

2001年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 旭成社

〒651-0091 神戸市中央区若葉通5丁目1-16-280
